

# 宮沢賢治「文語詩未定稿」評釈 五

信時 哲郎

## 71 製炭出灰小屋

もろの崖より たゆみなく

朽ち石まろぶ 黑夜谷

鳴きどよもせば 慈悲心鳥の

われにはつらき 睡りかな

榼組み直し ものおもひ

ものうちおもひ 榼組みて

はやくも東 谷のはて

雲にも朱の 色立ちぬ

### 大意

両側の崖から 絶えることもなく

古い石がころげおちてくる 夜の黒い谷

鳴き声が激しくなってくると ジュウイチの

私にとって辛くなるのは 眠りが浅くなることだ

榼を組み直しては 物思いにふけり

物思いにふけては 榼を組むと

はやくも東の空には 谷の向こうに  
雲には赤い 色が入り混じっている

### モチーフ

中学校時代に岩手山に登った帰路で泊まった製炭小屋での記憶を文語詩化しようとしたもの。「風野又三郎」でも同じ時の経験を書いていたが、文語詩作成時の賢治が重点を置いたのは、「風野又三郎」で楽しげに語られる谷底の生活でも、製炭職人の境遇でもなく、慈悲心鳥や転がり落ちる石の音に悩まされる老人の「われにはつらき」心境だったようだ。

### 語注

**黑夜谷** 固有名詞のようにも思えるが、モデル地だと思われる岩手山周辺には見当たらない。ありそうな名前として付けたとも思われるが、単に暗い夜のような谷という意味なのかもしれない。

**慈悲心鳥** ホトトギス目ホトトギス科の鳥であるジュウイチのこと。全長三十センチほどの夏鳥で、日本各地に渡来し繁殖する。ホトトギスやカツコウと同じく托

卵の習性があり、自分では雛鳥を育てることがない。日本では千メートルを越える山林に住み、明るい所にはあまり出てこないの、見かけることは稀だといふ。鳥名のジュウイチもジヒシンも、いずれも聞きなしかから来るもの。賢治がここで慈悲心鳥の文字を使つたのは仏教的な意味合いを込めていたのだろうが、夜を通して鳴くために安眠ができず、慈悲心鳥なのに慈悲心がなかったという皮肉を込めて使われているのだろう。ジュウイチと同じホトトギス科鳥であるホトトギスも、夜通し鳴くことで知られるが、この鳴き声で眠りを妨げられて憤る視点人物・封介を描いたのが「五十篇」の「暁」である。

### 評釈

黄野（22 行） 詩稿用紙に書かれた下書稿（一）（タイトルは「谷」）、その下部余白に書かれた下書稿（二）（右肩に鉛筆で㊦。また「短篇」とのメモもあり、『新校本全集』には「散文に改作の意図であろうか」とある）、その裏面に書かれた下書稿（三）（タイトルは「製炭小屋」）の三種が現存。「歌稿〔B〕」に「34 藪すべてたそがるゝころやうやくに／み山の谷にたどり入りぬ

る。」とあり、その下部余白のメモと共に赤インクで囲われているという。メモは次のとおり。

岩手山麓の谷の炭焼小屋、

その老人、カラフトの話、夜、灌木の白き花

羊歯、鳥の声

石のくづれ落つる音

いたゞきの風

「歌稿〔A〕」の「四十五年四月」にも、ほぼ同内容の短歌が収められているが、盛岡中学四年の時の作なのだろう。また一つ前に収録された短歌には「33 いたゞきのつめたき風に身はすべて／割われはつるもかなしくはあらじ。」とあるが、メモにある「いたゞきの風」を思わせるものであることから、同じ時の作歌だとしてよいように思う。

また、この33について「歌稿〔B〕」の欄外には

「◎運動会の次の日人々われらをなぐるといふ」という気になる書き込みがあるが、関係は定かではない。32

は「乾かぬ赤きチョークもて」（「一百篇」）の原体験を詠んだ歌で、「運動会の次の日」のメモとは別のメモが記されている。赤枠に囲まれていることから、

重要なものとして捉えていたようだが、どういう意図に基づくものだったのかは不明。

さて、下書稿(一)の初期形態から見えていきたい。

木炭窯の火をうちけみし

花白き藪をめぐりて

面瘠せしその老のそま

たそがれを帰り来りぬ

「よべはかの慈悲心鳥の族

よもすがら火をめぐり鳴き

崖よりは朽ちし石かけ

ひまなくまろび落ちにき」

ぜんまいの茂みの群も

いま黒くうち昏れにつゝ

焼石の峯をかすむる

いくむらのくろがねの雲

「いま妻も子もかれがれに

サガレンや 夷ぞにさまよひ

われはかも この谷にして

いたつきと 死を待つのみ」

とろとろと赤き火を燃し

まくろなる樺や柏に

瞳赤くうち仰ぎつゝ

老のそま かなしく云ひぬ

島田隆輔（後掲）は自伝詩篇として昭和六年に起稿されたのだらうとし、「風野又三郎」の「九月二日」に、又三郎が一郎や耕一に向かって岩手山から石が谷に向かって転がり落ちるシーンのあることも指摘している。また、島田が引用する以降の部分で、朝になると火が燃えているように空が赤かったという一節があり、下書稿(一)の記述と酷似している。実体験が文語詩と童話の両方に生かされたのだらう。少し長いが、この件りを引用しておきたい。

夜中の一時に岩手山の丁度三合目についたらう。あすこの小屋にはもう人が居ないねえ。僕は小屋のまはりを一ぺんぐるつとまはったんだよ。そしてまっくろな地面をじつと見おろしてゐたら何だか足もとがふらふらするんだ。見ると谷の底がだいぶ空いてるんだ。僕

らは、もう、少しでも、空いてゐるところを見たらすぐ走って行かないといけないんだからね、僕はほんどん下りて行つたんだ。谷底はいいねえ。僕は三本の白樺の木のかげへはいつてじつとしづかにしてゐたんだ。朝までお星さまを数へたりいろいろこれからの面白いことを考へたりしてゐたんだ。あすこの谷底はいゝねえ。そんなにしづかぢやないんだけれど。それは僕の前にまつ黒な崖があつてねえ、そこから一晩中ころころかさかさ石かけや火山灰のかたまつたのやが崩れて落ちて来るんだ。けれどもちつとその音を聞いてるとね、なかなか面白いんだよ。そして今朝少し明るくなるとその崖がまるで火が燃えてゐるやうにまつ赤なんだらう。さうさう、まだ明るくならないうちにね、谷の上の方をまつ赤な火がちらちら通つて行くんだ。檜の木や樺の木が火にすかし出されてまるで烏瓜の燈籠のやうに見えたぜ。

「風野又三郎」における又三郎の口述内容と文語詩と言へば、風の精である又三郎が、岩手山に登つて来た人々の様子を語る内容が「一百篇」の「岩手山巔」で生かそうとしたこともある。本作と内容的な連関があるよ

うには感じられないが、広い意味での関連作品だと言うことはできるかもしれない。

「歌稿〔B〕」の欄外に書かれたメモには、炭焼き小屋、老人、カラフト、鳥の声、転がる石の音など短歌33と34の連作にはない情報が記されているが、これがどの程度実体験に即しているのかは判断できない。ただ「風野又三郎」における鮮明な描写などもあわせて考えると、岩手山から下つた賢治が、夕暮れの頃に谷合にあつた炭焼き小屋に一泊させてもらったことがあり、その際に老人と会つて、樺太や北海道（「夷ぞ」は島田も書くように「蝦夷」の誤記で、北海道のことであろう）の話も聞いた、ということが実際にあつたように思われる。

樺太や北海道が登場するのは極めて興味深い。というのも、どちらも賢治が訪問し、大きな影響を受けた場所だからだ。その伏線ともいふべき事態が、実は中学時代にまで遡ることができたのだとすれば面白い。もつとも実体験ではなく、後年に付け足されただけのものかもしれないが：

この老人には妻も子もあつたようだが、「かれがれ」（「離れ離れ」）、すなわち「人の行き来や、手紙、歌のやりとりが途絶えがちであるさま。交わりの薄れゆくさま」（『日本国語大辞典』）になつて、今は樺太や北

海道を「さまよ」っているのだともいう。老人の言葉からすると、彼らが経済的な成功をしているようには受け取りにくいのが、おそらく仕事を求めるうちに、簡単に連絡も取れないような場所にまで行ってしまったということなのだろう。

中谷俊雄（後掲）は「男はひとりサガレンから本州まで南下して炭を焼かねばならなかった」、「知合いや親戚を頼りに家族もばらばらになり、自分もこの谷で病気になるって死ぬばかりだ」としているが、岩手から樺太や北海道に行ったのではなく、逆の順序で岩手にやって来たのかもしれない。いずれにせよ、あまり余裕のある暮らしをしていたわけではないことは確かだろう。

大正十四年九月刊行の『岩手県林業要覧』（岩手県）によれば、「本県ハ本邦第一ノ木炭生産地ニシテ其産額一ヶ年四千六百万貫一千余万俵ニ達シ約八割三千六百余万貫ハ之ヲ県外ニ移出シ一千二百万貫（市場価格）ノ収入ヲ得ツツアリ移出先ハ東京及附近町村ヲ主トシ移出数九割ニ上リ其他青森、宮城、神奈川、埼玉、千葉、群馬、茨城県等十数府県ニ向ツテ供給シツツアリ」とのこと。粗悪だった品質を明治末期から講師を招いて品質改良に取り組んだ成果なのだという。明治末年の岩手の製炭は、ちょうど発展途上にあつた頃だろうが、岩手山麓

の谷合の老人ということであれば、旧態依然の製炭をしていた可能性の方が高いようにも思われる。

昭和二年十月二十八日の「時事新報」には「将来を悲観される木炭に一大福音」として東京大学名誉教授の河合鈿太郎が自身の人造木炭について寄稿しているが

（「神戸大学新聞記事文庫」燃料（二―一三三））、その中で岩手県の製炭について次のように書いている。

我が国の木炭は、台所燃料としては西洋の他の燃料より数等優つてゐるものではありませんが、惜いことに、その原料として特種な闊葉樹、それも適當の大きさのものでなければなりませんから、今後三十年にして内地の製炭事業は行きづまるだらうと悲観せられてゐる。現に山林豊富の東北地方さへ鉄道線路から七八里も離れた所で伐木してゐる有様で早くも支那から多量の木炭を輸入してゐます。木炭の消費量は年十億貫、しかもその直接の生産者である炭焼の手取りは甚だ僅少なもので、試みに岩手地方の例をとれば、一俵の焼賃三十五銭、山出し運賃二十銭、縄及双子代十銭、軽便鉄道費五銭、木代十銭、駅での手直し検査料、荷札込めて六銭、店の費用と金利六銭、鉄道運賃十二銭、合計一円十五銭を要し、尚この上に色々な手が重なつ

て、現在の値を維持してゐるのであつて、正に一大改革を要することが分ります、併し乍ら従来の製炭方法ですと、原料に制限を受ける点に於て、山間僻地に一時的に窯を築き、手加減によつてする外なく而も甚だむづかしいものであつて熟練した炭焼でも気に入つた様に焼けるのは一年七八回といふ有様です、窯の如きもかの備後屋長左衛門の窯が、最も立派だとされてゐます。それで色々と木炭代用品に就て苦心する者も出ましたが、何れもうまく行つてゐません

賢治は「〔盆地に白く霧よどみ〕」〔五十篇〕において遠野盆地の山村で「藻を装へる馬ひきて、ひとびと木炭を積み出づる。」と書いていたが、この詩の取材年にあたる昭和六（一九三一）年について、賢治は「西暦一千九百三十一年の秋の／このすさまじき風景を／おそらく私は忘れることができないであらう」（『小作調停官』）と書くほどの凶作を予期していた。『定本語彙辞典』の年表では昭和六年一月の記事として「農産物生産過剰、繭価木炭価惨落」ともある。また、翌年の三月刊行の「児童文学2」には「グスコブドリ」の伝記」を掲載し、第一章でブドリの両親は二年続きの冷夏から収入

の道を断たれ、食べる物もなく、二人の子どもを残して森に消えている。

しかし「製炭小屋」下書稿(二)になると、賢治は樺太や北海道にいる妻子についての言葉を消し、炭焼きを想像させる言葉も消してしまふ。この下書稿(二)に賢治は〇を付けていたことを思うと、賢治は製炭という仕事の苦しみ、家族との離別よりも、安眠を妨げられることによる疲弊の方を強調しようとしていたようにも思われる。

「よべはかの慈悲心鳥の族

よもすがらけたましくて

このひごろ痛むみうちの

いかにともなれとおもひし」

ぜんまいの茂みは黒く

花咲ける藪はほのかに

焼石の峯をかすむる

いくひらのしろがねの雲

「立ちいでて鳥をおどかし

からくまたねむるとすれば

崖よりぞ朽ちし石かけ

ひまもなくまろび落ちしか

谷

瞳赤くうちすかしつゝ

老のそまかなしく云ひぬ

このあとの下書稿(三)が最終段階の原稿となるが、ここには「製炭小屋」のタイトルが付されていることから、さすがに老人が製炭に関わっていたことは示されているものの、やはり炭焼きの苦しみや一家離散の苦しみといったことについては触れられることがなく、「鳴きどよもせば 慈悲心鳥の／われにはつらき 睡りかな」とあるように、下書稿(二)で示されたような安眠ができないことによる疲弊を強調する路線が守られているようである。

まだ年若かった賢治にとって、炭焼きの老人と一夜を過ごすという異文化体験は、かなりインパクトの強いものだったように思われるし、炭焼職人の生活やその窮状についても書いてもよかったですだろうものを、なぜか賢治は回避しているように読めてしまう。

敢えて理由を探してみれば、「風野又三郎」には「一晚中ころかさかさ石かけや火山灰のかたまったやが崩れて落ちて来るんだ。けれどもどつとその音を聞いてるとね、なかなか面白いんだよ」とのみ書かれていた谷底での「面白い」生活ではなく、ここに病気の人が暮らしていたら、どのように思うか、という病人の視点を打ち出そうとしていたからであるようにも思われる。

そう思えば「五十篇」の「毘沙門の堂は古びて」には「胸病みてつかさをやめし、堂守」が登場し、「一百篇」の「ひかりものすとうなるごが」には、「こなにまぶれ」たためか、それとも胸の病なのか定かではないが、咳をしながら歩み去る水車小屋の「あるじ」が描かれてもいた。

ただ本作は未定稿であるため、「五十篇」や「一百篇」所収の定稿作品とは違って、最晩年の賢治の心境や病状を反映したものとは言えないかもしれない。しかし、たとえば昭和三年から五年に書かれたとされる「疾中」にも「眠らう眠らうとあせりながら／つめたい汗と熱のまゝ／時計は四時をさしてゐる」(「眠らう眠らうとあせりながら」といった言葉があることを思えば、未定稿を書いていた賢治にも、鳥の声や転がり落ち

る石の音に悩まされるというモチーフが立ち上がってきても不思議ではないだろう。

### 先行研究

中谷俊雄「ジュウイチ」(『賢治鳥類学』新曜社 平成十年五月)

赤田秀子「短歌から文語詩へ」「釜石よりの帰り」「製炭小屋」を中心に「ワルトラワラ14」「ワルトラワラの会 平成十三年三月)

石井竹夫「宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の発想の原点としての橄欖の森 アワとジョバンニの故郷 後編」「人間・植物関係学会雑誌18―2」人間・植物関係学会 平成三十一年三月)

島田隆輔「『賢治自伝』詩譜の試み 中学生時代篇(下)」  
「論攷宮沢賢治19」中四国宮沢賢治研究会 令和三年十月)

## 72 空小公台 「一一」

そらの微光にそゝがれて  
いま明け渡る甲板は

綱具やしろきライフヴイ  
あやしく黄ばむ排気筒

はだれに暗く緑する  
宗谷岬のたゞずみと  
北はま蒼にうち睡る  
サガレン島の東尾や

黒き葡萄の色なして  
雲いとひくく垂れたるに  
鉛の水のはてははや  
朱金一すじかゞやきぬ

髪を正しくくしけづり  
セルの袴のひだ垂れて  
古き国士のおもかげに  
日の出を待てる紳士あり

船はまくろき砒素鏡を  
その来しかたにつくるとき  
漂ふ黒き材木と  
水うちくぐるかいつぶり



俄かに朱金うち流れ  
朝日潰ひて出で立てば  
紳士すなはち身を正し  
高く拍手うちにけり

時にあやしやその古金  
雲に圧さるゝかたちして  
次第に潰ひ平らめば  
紳士怪げんのおもひあり

その虚の像のま下より  
古めけるもの燃ゆるもの  
湧きたゝすもの融くるもの  
まことの日こそそのぼりけり

舷側は燃えヴェイも燃え  
綱具を燃やし筒をもし  
紳士の面を彩りて  
波には黄金の柱しぬ

## 大意

空から淡い光がそそがれて  
今や明るくなつた甲板には  
綱などの船具や白いライフブイ  
不思議な黄色がかつた排気筒が見えている

まだらに暗く緑に見えている  
宗谷岬のたたずまいと  
北には青く眠っているかのように  
サガレン島の東側の尾が見えている

黒ブドウの色をした  
雲がたいへん低くにまで垂れ下がり  
鉛色をした水の遙か彼方にはもう  
朱金色が一筋輝き始めている

髪をただしく整えて  
セルの袴の襷を垂らして  
古い時代の国士のおもかげも感じられるような  
日の出を待つ紳士の姿があつた

船は砒素鏡のような黒く輝く航跡を  
船尾に作っている時に

黒い材木は漂い

カイツブリは水に潜っている

朱金色が急に流れて

朝日が潰れながらに出て来ると

紳士はさっと身を正して

高く柏手を打つのであった

その時あやしいことに古金色になった朝日は

雲に圧されたようになって

次第に潰れて平らになってしまおうと

紳士は怪訝な表情をするのであった

その朝日の虚像の真下からは

古めいたもの燃えるもの

湧きたつようで融けるようなもの

まことの朝日が昇ってくるのであった

朝日を受けて舷側は燃えてブイも燃え

綱も燃えて排気筒も燃え

紳士の顔にも光が射して

波には黄金の柱が立つのであった

## モチーフ

大正十二年夏に賢治は樺太を訪問したが、その帰路での詩であるようだ。一時は「宗谷（一）」（「未定稿」）と対の関係にするつもりもあったように思われるが、どちらも未定稿に留め置かれている。ものものしいでたちで朝日を拝む「紳士」への批判であるようにも感じられるが、賢治の好んだモチーフの一つである見間違いを描きたかったようで、社会的な詩にするつもりはなかったように感じられる。

## 語注

**はだれ** 『日本国語大辞典』によれば「はらはらと雪の降るさま。また、雪や霜などの薄く積もったさま。はだら。ほどろ」とのこと。賢治が樺太に渡ったのは大正十二年の夏であったことから、実際の雪ではなく、宗谷岬がぼんやり見える様子が雪のように見えたということだろう。

**宗谷岬** 北海道の最北端にあたる岬で宗谷海峡に臨む。

北緯四十五度三十一分。

**サガレン島** オホーツク海の南西部にあるロシア最大の島。明治三十八年から昭和二十年まで北緯五十度まで

の南樺太は日本領。ロシア語でサハリン。また日本ではサガレンとも呼んだ（満州語に由来するのとこの）。賢治は最初「サガレン鮭の東の尾」と書いていたが、サガレンが鮭の形に似ていることから。ただし、賢治が見たのは「東の尾」ではなく西の尾（西能登呂岬）であろう。先行作品であると思われる「大きな西洋料理店のやうに思はれる」には「樺太の鮭の尻尾の南端」と書かれている。

**セルの袴** 梳毛織物の一種で、オランダ語のセルジから来ているという。『世界大百科全書』によれば一八九九（明治三十二）年に愛知県下で初めて織られ「着尺のほかには袴地、コート地に使われる。セル機業は愛知県を中心に発展し、大正から昭和13年ころまで大流行が続いた」という。

**国士** 『日本国語大辞典』によれば「一国の中ですぐれた人物。国家にとって有用な人物。また、自分の身をかえりみないで、国事に尽くす人」。『デジタル大辞泉』には「1 国家のために身命をなげうって尽くす人物。憂国の士。2 その国で特にすぐれた人物」とある。大正十二年十月八日の「読売新聞 朝刊」には、甘粕憲兵大尉が関東大震災の後の混乱の最中に大杉栄らを虐殺したことを批判して「昔義士とか国士と

か謳はれた人達が、大義の為に佞奸を斃すと云ふ時は、先づ脱藩届を出して、国籍を離れ、以て後日累を君国に及ぼさざらんことを図つたものだ。憂国の士の苦衷感泣に堪えないものがある」とある。同時代的には、こうしたイメージだったのだろう。「春と修羅 第二集」の「地蔵堂の五本の巨杉が」には、「いま教授だか校長だかの／国士卓内先生も／この木を木だと思つたらうか」とあり、純粹な敬意を示すより、幾分ユーモアを込めて使っている。後述のとおり、この国士は賢治と同じ時期に樺太を訪問していた貴族院議員の一人かもしれないが、ユーモアを込めてはいても、特に皮肉や批判と言つたものは窺いにくい。「五十篇」の「車中「一」」に「開化郷士と見ゆるもの」という句が登場するが、こちらには批判的な気持ちが込められているようだ。

**砒素鏡** 猛毒である砒素を微量でも検知するためのマッシュ法を使うと、水素とともに発生する砒素化合物であるアルシン（AsH<sub>3</sub>）が冷たい容器に触れて鏡のような光沢の黒紫色の単体砒素が蒸着する。それを賢治は未明の海面に喩えている。

かいつぶり カイツブリ科の水鳥。主に淡水域で生息し、留鳥として日本全域に生息するが北海道や本州北部では夏に飛来する。

### 評釈

黄罫（22 22 行）詩稿用紙に書かれた下書稿（タイトルは「宗谷」、右肩に赤インクで㊦）が一種現存。大正十二年夏に樺太に渡った際の取材に基づく。「未定稿」に「宗谷〔一〕」があるが、これは元は「北見」とあったものを改題していることから、賢治はこの二編を「対」のように完成させるアイディアがあったのではないかと思われる。ただ、テーマが異なり過ぎていたためか、結果としては両篇とも未定稿に留め置かれることになっている。

浜垣誠司は自身のブログ「宮沢賢治の詩の世界」（「西洋料理店のようなの？」<https://ihatov.co/>）平成十七年九月五日）で、『新校本全集5』の「補遺詩篇I」に収められた断片「〔大きな西洋料理店のやうに思はれる〕」には本作と関連すると思われる語句が多いことから、文語詩に改作される前の口語詩の断片ではないかとする。使用されている「丸善特製 二」と印刷された原稿用紙は『春と修羅（第一集）』の印刷用原稿など

に使われたものであることから、「春と修羅（第一集）補遺」の位置にあったものが、たまたま裏面に童話「毒もみの好きな署長さん」が書かれたことから原稿が保存されたのではないかとするが、そのとおりだろうと思ふ。

大きな西洋料理店のやうに思はれる。そして一度けむりと朱金の間から藍いろに起伏するものはやっぱり樺太の鮭の尻尾の南端だ。この風は丁度あけ方の岩手山の三合目波にはちやんと砒素鏡もある。

浜垣はまた、「大きな西洋料理店のやうに思はれる」という詩句について、賢治が乗船した対馬丸の食堂やサロンといった設備について書いていたのではないかとする。

本作について斉藤征義（後掲）や萩原昌好（後掲）は、賢治が樺太に渡る往路での詩であるとしていたが、赤田秀子（後掲）は、帰路での作品であるとす。まず「宗谷岬のたぐずみ」について「背後にあるものをたたくみとは言わない」とし、「春と修羅（第一集）補遺」に

ある「宗谷挽歌」に「永久におまへたちは地を這ふがい。／さあ、海と陰湿の夜のそらとの鬼神たち／私は試みを受けやう。」などとあるのとは、あまりにも雰囲気が異なることなどをあげている。賢治が樺太を離れたのが八月七日だったか九日だったのかについて様々な議論があるが、七日には「貴族院議員の一行が樺太を離れていることから、賢治が書いた「国士」のモデルが彼らだったのではないかともいう。

「宗谷（一）」を論じた際（信時哲郎 後掲）、一般に復路よりも往路の方が印象が強く、「宗谷（二）」が往路での作品だと考えられることもあって、往路でのものとしたが、浜垣誠司は自身のブログ「宮沢賢治の詩の世界」（「宗谷（二）」の紳士は貴族院議員？」<https://ihatov.cc/> 平成十七年七月二十九日）で「宗谷岬が「緑」に、サガレン島が「蒼」に見えていることから、船の位置は、サハリン島よりも宗谷岬の方に近いところにあると推測できます。そして、作品中の時刻が日の出直前、すなわちすでに連絡船の目的地到着に近い時間であるということをおわせて考えれば、これは大泊を夜に発ち稚内に翌朝着く上り便、賢治にとって「復路」だったことがわかります」と書き、また、貴族院議員たちが

「国士」だったのではないかという点でも赤田と同じ主張を展開している。

さらに浜垣の指摘を受けて加倉井厚夫は自身のブログ「緑いろの通信」（「文語詩「宗谷（二）」（文語詩未定稿）にみる夜明けの空 1923年8月8日宗谷海峡で迎えた朝」平成十七年九月六日 現在はリンク切れ）で、古天文学の手法で日の出の時間が午前四時二十二分となり、船は宗谷岬のすぐそばにまで迫っていたことを実証的に示している。

こうして三者の説を前にしてみると一般論として往路の記憶の方が印象に残りやすいといった程度の論拠しかない拙論は撤回の必要がありそうだ。

また、浜垣はブログ「宮沢賢治の詩の世界」（「7日乗船説と9日乗船説（1）」<https://ihatov.cc/> 平成二十一年一月二十九日）で、貴族院一行の一人であった小林幸太郎の伝記である名島武治『北海魔王小林幸太郎君』（伊坂出版部 昭和二年六月）に、樺太の大泊を出て稚内に向かったのが九日だと記されていることを発掘している。詳しくは浜垣のブログに譲りたいが、賢治が樺太を出たのが八月七日か九日かについては、まだ最終判断をできない状況のようで、賢治が貴族院の一行とともに乗船していたのか、その様子を「宗谷（二）」に詠み込んだのかと

いったあたりについても結論を出せるだけの情報は揃っていないようだ。

それはさておくとして、賢治はここで何を描こうとしたのだろう。赤田（後掲）は、「立派な紳士のあがめるものこそ、偽りのものと寓意を読むことも可能である」としているが、確かに「髪を正しくしけづり／セルの袴のひだ垂れて／古き国士のおもかげに／日の出を待てる紳士あり」という厳肅さ、しかし、そんな彼が日の出に向かって「身を正し／高く柏手うちにけり」とものものしく対応しながら、その太陽が「雲に圧さるゝかたちして／次第に潰え平らめば／紳士怪げんのおもひあり」という事態に立ち至ったという滑稽さは、文語詩稿全体にある権力者批判と弱者の庇護といった方向性と一致しているように思える。

しかし、語注にも書いたように「国士」に揶揄的な意味合いが込められた用例はなく、「紳士」についても、「注文の多い料理店」に「二人の若い紳士」が登場し、彼らに対する賢治の思いは批判的であったと思われるにしても、例えば「三原三部」では船の上から目前の三浦半島を見ながら、後方に遠ざかる大島を気にしているところで次のような詩句が登場する。

……甲板の上では

福島県の紳士たちが

熱海へ行くのがあらしでだめだとつぶやいて

いろいろ体操などをやります……

社会の上層にいる存在が甲板の上に出ているというだけでも本作と共通しているが、まさか昭和三年六月の船上で大正十二年八月の樺太からの帰路の記憶が呼び戻されたわけではないにせよ、ここに登場する「紳士たち」に対しても特に賢治が批判的であったように思えない。

村上英一（「あな雪か 屠者のひとり」）『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』は、賢治が見間違いや思い違いに關心を持っており、文語詩で「五十篇」の「あな雪か 屠者のひとり」に雪と雉とを見間違える屠者を描く他にも、「光る山」を海だと錯覚する「高原」（『春と修羅（第一集）』）、虹を火事だと錯覚する「報告」（同）、子熊がひきぎくらの花と雪を間違える童話「なめとこ山の熊」などを描いていることを指摘している。とすれば賢治は見間違いの決定的な現場に居合わせたこととなり、亡くなった妹トシを追いかける詩群の一つとして『春と修羅（第一集）』に掲載するのはさすがにとまどったにしても、書き留めずにはいられない出来事だったようである。

また、昇っていく朝日について「古めけるもの燃ゆるもの／湧きたゝすもの融くるもの／まことの日こそそのぼりけり」など、過剰なくらいに言葉が費やされていることから、太陽への崇拜といったモチーフを読もうとする人もあるかもしれないが、海に臨んで日の出を見たり、山頂でご来光を拝んだ経験がある人ならば共感するところがあるはずで、ここに思想的な背景は、あまりないように感じられる。紳士を惑わせたような現象についても、加倉井（前掲）が「雲や大気による錯覚」としていうように、特に珍しい現象であったというわけでもないようだ。

賢治と太陽といえば、「未定稿」の「雪峽」で「たゞ深し天の青原／雲が燃す白金環と／白金の黒の崖を／日天子奔せ出でたまふ」と書いたこともあるし、日本神話における天照大神が太陽神であること、日蓮は清澄山から太平洋に上る太陽に向かって南無妙法蓮華経を唱えたことなど、さまざまな宗教的・民俗的な背景を考えることもできそうだが、たとえば大正七年（十二月十日前後）に保阪嘉内に宛てた書簡では、前年夏に保阪と岩手山に登って朝日を拝んだ際に「一人の人は感激のあまり皮肉のあまりゲートルを首に巻き付け、また強い風が吹いて来て霧が早く早く過ぎ行きわたくしの眼球は風にお

しつけられて歪み、そのためかまたはそうでなく本統にか白い空に灼熱の火花が湧き、すみやかに散り、風を恐れる子供は私にすがりついたのでした」と書いており、この喜びにはわざわざ宗教や思想というものを呼び出して説明する必要はないように思われる。

また、同じ書簡で、弟や従弟と岩手山に登ってご来光を仰いだ際のことにも触れているが、「弟といここはかゞやく山の姿白樺の美しさに叫んではしり出したうたう見えなくなりました」と綴り、「勝手にわたくしのきもちのよいことばかり書きました」として書簡を終えている。

この朝日については、特に宗教的な背景があるわけでもなく、気象現象としての珍しさがあつたわけでもないようだ。また社会的な地位の高い人が関わったということも、あまり関係ないようだが、それだけ船上から見た朝日の美しさと、その直前に見かけた紳士の錯覚のおもしろさを純粋に詩化しようとしたように捉えるべきなのではないかと思えるのである。ただ、先にも記したように、この経験が『春と修羅（第一集）』に採用されることはなく、また文語詩としても定稿化されることもなかったのが実際のところのようだ。

## 先行研究

- 斉藤征義「宗谷〔二二〕」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』柏プラーノ 平成十二年九月)
- 萩原昌好「宗谷(二二)について」『宮沢賢治「銀河鉄道」への旅』河出書房新社 平成十二年十月)
- 赤田秀子「文語詩を読む その12 行きか、帰りか、七日か、九日か。未定稿「宗谷〔二二〕を読む」(『ワルトワラ24』ワルトワラの会 平成十八年十一月)
- 信時哲郎「宮沢賢治「文語詩未定稿」評釈四」(『甲南国文70』甲南女子大学国文学会 令和五年三月)

## 73 「棕櫚の葉やゝに痙攣し」

棕櫚の葉やゝに痙攣し  
陽光横目に過ぐるころ  
湯屋には声のほのかにて  
溝水はほとと落ちたるに  
放蕩無頼の息子の大工  
このとき古きスコットランドの  
貴族風して戻り来れり

## 大意

シュロの葉が痙攣したよう揺らぎ  
太陽の光が射しているのも横目に感じられる頃  
湯屋の方からはわずかに声も聞こえ  
溝に水がザツと流れ落ちると  
放蕩無頼な大工をしている息子は  
この時に古いスコットランドの  
貴族のようないでたちで戻って来た

## モチーフ

下書稿が「『東京』ノート」に書かれていることから東京滞在中に公衆浴場を利用した時の経験に基づくものだろう。「古きスコットランドの／貴族風」とあるのはスコットランドの伝統衣装であるスカート状のキルト(フエーリア)のことではないだろうか。東京の文明や風俗に対する批判意識と考えることもできそうだが、新風俗を見た驚きと、それをスコットランドの貴族風だという見立てを書こうとしたもののように思える。

## 語注



**棕櫚** ヤシ科シユロ属の総称。日本でも古くに持ち込まれ、観葉植物として全国的に普及した。公衆浴場の脱衣所に置かれていたのだろう。

**湯屋** 料金を取って入浴させる施設である銭湯のことを湯屋とも呼んだ。近世までは蒸風呂を風呂屋、温湯浴を湯屋とも使い分けたが曖昧になったとも言う。ただ、ここでは銭湯における浴槽のある部屋（浴室）を指すのであろう。

**スコットランドの貴族風** スコットランドはイギリスのグレートブリテン島北部を指し、一七〇七年までは主権国家であった。その貴族風というのがどのようなものか、想像しにくいだが、スコットランドの伝統衣装であるキルト（フェーリア）であった可能性があるように思う。「放蕩無頼の息子」が、入浴にあたって持ち込んだ手拭いを腰に巻いた様子が、スカート状のキルトのようだというのではないかと思われる。「東京ノート」の「光の渣」にも「そのあるものはスコットランド標騎兵のよそほひをして／無邪気な少年鼓手のやうに」とあり、関連も考えられる。

## 評釈

「東京ノート」に書かれた下書稿(一)、黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(二) (右肩に藍インクで①)の二種が現存。

「東京ノート」の使用時期は昭和三年六月以降とされるが、本作の下書稿(一)は「一九二一年一月より八月に至る／うち大正十年」に収められている。賢治が家出上京し、アルバイトをしながら国柱会で奉仕、そして創作活動を始めた時期である。上京中、賢治は高等農林学校時代の恩師である関豊太郎を訪ね、その時の経験をいくつか書き留めているが、本作はその直後に置かれている。おそらく大正十年に東京の「湯屋」、すなわち銭湯を訪ねた際のものだとしてほぼ間違いないだろう。

湯屋と言えば、江戸時代に書かれた式亭三馬の『浮世風呂』(一八〇九(文化六)年〜一八一三(文化十)年)にも庶民が入浴を楽しみ、社交の場としても風呂屋が繁盛していたことが知られているが、近代に至っても愛された施設であると言ってよい。

ただ、近代に至ると男女混浴の禁止、石榴風呂式浴場(湯が冷めるのを防ぐために浴槽を板戸で仕切り、板の下からかがんで真つ暗な浴槽に出入りする方式の風呂)などが禁止された。また、ひそかに売買春がおこなれた

とも言われる二階風呂が禁止されるなどの改良も進められた。

さらに時代が下つて大正時代になると、中野栄三（『近代の銭湯』『入浴・銭湯の歴史』雄山閣 昭和五十九年一月）によれば、次のような変化があったという。

銭湯の洗い場や女湯との境がタイル張りとなつたのは大正十年（一九二一）頃からである。そして浴槽がやはりタイル張りで温泉風の丸形のもが現われたり、長方形でもやや洗い場の前方に出て、浴槽の周囲が歩けるものが出てきた。さらに昭和三年には「上り湯」湯槽の使用上の清潔が叫ばれた結果、蛇口から小桶に汲むカラシ制となり、いわゆる「モダン風呂」の銭湯が出現するに至つたのである。

「大正十年頃」と言えば、まさに賢治が上京した時である。東京で接する新しい文化や風俗に関心をもつた賢治であれば、当然、新しくなり始めた銭湯にも興味を抱いたはずである。

神田猿楽町にあつたキカイ湯は、その命名が汽船の機械釜（ボイラー）を使ったことにあつたとのことで、ま

ずそこにモダン性が感じられるが、『公衆浴場史』（全国公衆浴場業衛生同業組合連合会 昭和四十七年五月）によれば、「大正元年に神田猿楽町の銭湯キカイ湯（東由松経営）が、浴室（流し場）周囲の板壁をいかしてなにか絵をかかせることを考え、画家川越広四郎に依頼して絵をかいてもらった。ところが、この絵が満都の評判となり、市内各湯もこれにならって思い思いの絵をかかせて浴客を喜ばせ、以来、銭湯の周囲の壁面は一般的となつた」とのことである。つまり、今日、銭湯と言えは思い浮かぶタイル張りの浴槽やカラシ、ペンキ絵などは、すべてこの大正期の「モダン風呂」に原点があつたようである。

町田忍（『ペンキ絵背景画』『銭湯へ行こう』平成四年二月 TOTTO出版）によれば、「（ペンキ絵の）少なくとも私が見て回つた範囲での北限は新潟県であり、西は岡山県であつた」というので、岩手では、このタイプは普及していなかつたようである。賢治が花巻で温泉文化に親しんでいたことについては岡村民夫『イーハトーブ温泉学』（青土社 平成二十年七月）などに詳しいが、それだけ入浴文化とも関りの深かつた賢治だけに、東京でのモダン銭湯体験は、かなりのインパクトを与えたのではないかと思われる。

もちろん賢治が東京で触れたものすべてに肯定的であったわけではない。「東京」ノートには昭和三年六月に書かれた「高架線」が収められているが、杉浦静（「いざうましめずよみがへらせよ」「東京」ノート）の〈自然〉、『宮沢賢治 明滅する春と修羅 心象スケッチという通路』蒼丘書林 平成五年一月）によれば、「関東大震災後の東京の復興がもたらした新たな都会文明とそれを利根的に享受する東京の人々の姿を、疲れ・心身の或いは生命の衰弱と捉え、そこに生命を回復させるエネルギーとして、「澄める瀨気」すなわち〈自然〉を対置したのであった」と書いている。「東京」ノートは、この昭和三年の東京滞在から書き出されたものなので、ノートには東京の新しい風俗に対して批判的なトーンが貫かれていると考えることもできるかもしれない。

しかし、その一方で、同ノートには「浮世絵博覧会印象」など、東京でのよい体験についても書かれており、賛成か反対かの二者択一で決めつけてしまうのはためらわれる。信仰か科学か、都会か田舎か、文明か伝統か、といった問題系と同じように、賢治がどちらか一方だけを尊重したと考えるのは不毛な議論であるように思う。ここでは新しいものに驚き、感動し、また、時に呆れ、

憤った、というように、捉えておくのが現実的であろう。そうした様々な思いを抱きながらの新風俗との出会いを表現したものが、本作の位置だ、と考えるおくこととしたい。

さて、「古きスコットランドの／貴族風」についてだが、語注にも書いたとおり、伝統衣装のキルトを指すのではないかと思う。というのも、手拭いを巻いていたのをキルトに喩えたと思えるからだ。

手拭いというのは、もちろん公衆浴場を利用する際の作法として、前を隠すために使われていたと思うのだが、大正当時の日本人にそうした風俗があったのかは気になる所だ。

大正時代の銭湯や温泉の内部の写真をみると、手拭いや猿股で隠しているものが多いようだが、これは写真用の演出であるようにも思われ、なんとか実情について探してみたところ、中村国雄（「そのままのまま」『風呂の話』（文理書院ドリーム出版 昭和四十二年六月））という文があった。

中村が終戦後の或る時、アメリカ駐留軍と野球をしたことがあり、試合の後、先方からシャワーか風呂が使いたいとの要望があり、銭湯を手配したのだという。「アメさんたち喜ぶまいことか。パッパとユニホームを脱ぐ

と洗場へ。タイルのはげた羽目板に下手な富士山のペンキ絵を描いた汚ない銭湯で、大入満員だったけれど、彼らはなんのおかまいもなくワイワイ冗談をいながら浴びたり洗ったり、そのにぎやかさにもあきれたが、もつとびつくりしたのは彼らが全然タオルで股間をおおうようなことをせず、実に正々堂々と巨大なる「男」をブラリンコン、ブラリンコンと誇示していることであつた」とある。そして「いったい日本の男性はバスの中で、なぜあんなにタオルで前をおおうのか」と聞かれ、「別に何という理由もない、ただ昔からの習慣だろうと答える」と、彼は――あれだけはやめた方がよい、あんなことをするのは最も汚らわしい習慣である、アメリカではあんなことはいっさいしない」というやりとりがあつたらしい。

筆者の中村国雄は明治三十六（一九〇三）年鳥取県生まれ。生活科学協会で働いていた人物だとのことだが、賢治より七歳年下で、清六の一年上だ。賢治が家出上京していた大正十年には十八歳。「放蕩無頼の息子の大工」と同じ年頃であろう。決定的な裏付けであるとは言えないにしても、銭湯などに行った際に手拭いで前を隠す風俗は、当時の日本人男性に一般的なことだつたとし、てよいように思う。

『公衆浴場史』（前掲）を調べてみると、「內衣」の説明として「仏典で入浴の際、他人の皮膚の接することを戒め、そのため着用の布で造つた衣で明衣（あかは）ともかき、国語ではユカタビラ（湯帷子）と称し、略してユカタ（浴衣）といい、和文ではイマキ（今木）イマイ（今衣）とも書いてある」とあり、しかし「平安末か鎌倉初期ころ辺から、入浴する男子は身体を洗うにじやまになるので、明衣（湯帷子）がはぶかれて、ただ前を隠すためにあらためて湯褌という入浴専用の褌が使用されることにあつた」とあつたのが見つかった。また愛知県公衆浴場生活衛生同業組合のホームページ（[https://aichi1010.jp/howto\\_useful\\_tips/](https://aichi1010.jp/howto_useful_tips/)）によれば、「上記の湯褌、湯巻着用は、ともに江戸中期までの習慣で、その後手ぬぐいで隠して入浴するようになったらしい」とあつた。これらを信じれば、中村が「ただ昔からの習慣だろう」としていたのも、強ちはずれているわけでもないようだ。

在京中の賢治は、自分の信仰や人生について、また、創作についても様々に考えていたことと思われるが、そんな日々の中で、モダンな銭湯に居合わせたモダンな青年のスコットランド風とも思えるキルトとの遭遇を愉快に感じた可能性は低くない。

「東京」ノート」に「一九二八、六、一九」の日付がある「神田の夜」というタイトルの詩篇があるが、ここには「湯屋では何か／アラビヤ風の巨きな魔法がさされてゐて／夜中の湯気が行きどこもなく立つてゐる」とあり、本作と同じく東京での銭湯体験を書いたようである。「アラビヤ風」と「魔法」「湯気」とあれば、『アラビアン・ナイト』の「アラジンとふしぎなランプ」に喩えているのだと考えられるが、『春と修羅（第一集）』の冒頭作である「屈折率」に「（またアラツディン、洋燈とり）」ともあったが、賢治が東京のモダン銭湯を楽しんだことは確かなようである。

一九二八（昭和三）年の東京での銭湯体験を書いた段階で、賢治が大正十年に銭湯で経験したスコットランドの貴族風の放蕩息子の記憶をどのようにイメージしていたのかわからない。ただ、同じノートに収められている限り、また、未定稿とはいえ文語詩化が試みられたことを思えば、賢治にとっては重要な（あるいは強く印象に残った）経験だったのであろう。

そこに都会文明批判や東京批判の目を見ることがも不可能ではないだろうが、今は新しい風俗を見たこと、そしてそれをスコットランドの貴族風だと見立てた面白さが文語詩のモチーフであった、と捉えておきたい。

①が付されていることから、お気に入り詩であったことがうかがえるが、定稿化に至らなかったのは、東京での取材ということから忌避されたのではないかと思われる。

#### 先行研究

なし

74 「このみちの醸すがごとく」

このみちの醸すがごとく  
粟葉などひかりいでしは  
ひがしなる山彙の上に  
黄なる月いざよへるなり

夏の草山とになひて  
やうやくに人ら帰るを  
なにをかもわがかなしまん  
すゝきの葉露をおとせり

#### 大意

この道が発酵しているかのように

粟の葉などが光り出したのは

東に折り重なった山々の上に

黄色い十六夜の月が漂い出たからであった

夏草を山のように背負って

ようやく人々は家路についているが

何をいったい私は悲しんでいるのだろうか

ススキの葉は夜露をおとし始めている

### モチーフ

下書稿(一)は純然たる恋愛詩で、盛岡中学校を卒業した後、岩手病院に入院した際の看護師への思いを綴っていたようだが、最終形態では、恋愛を感じさせる部分がすべて削除されている。賢治としては思うようにならない恋を悲しむ詩として完成させる道を絶ち、秋の夕暮れ時の物悲しさを描く道をたどったのだと考えたい。

### 語注

**醸す** 『日本国語大辞典』には第一義として「穀類などをこうじにして水を混ぜ発酵させて酒、しょうゆ、酢(す)などをつくる。また、広く、酵素の作用によつ

て原料を分解し食品をつくる」とあるが、ここでは発酵によって温度が上がって湯気が立ち上っているような状況を指すのであろう。

**山藁** 山並みのこと。東方であるとすれば北上山地であろう。下書稿(一)の手入れ段階で「高原の上」ともあつたことを思うと外山高原や区界高原あたりを指していたのかもしれない。

**いざよへる** 東の空に夕方から見始める月となれば、十六夜いざよひのことだろう。「いざよふ」とは、元はためらうこと、ぐずぐずすることを指し、『日本国語大辞典』には「満月の翌晩は月がいさよう、つまり出がや遅くなる」とある。大正三年の旧暦七月十六日だとすると九月五日、八月十六日だとすると十月五日にあたる。

**夏の草山**とにひて 人々は山に入って大量の草を刈ってきたが、牛馬の飼料として、発酵させて田畑の肥料にするための刈敷の材料として、また屋根用のカヤを葺くために用いられた。

### 評釈

黄野（22 0 行）詩稿用紙に書かれた下書稿（一）（右肩に赤インクで㊦）、その裏面に書かれた下書稿（二）（断片）、その左上に書かれた下書稿（三）の三種が現存。

下書稿（一）は五連構成で自らの恋愛経験を詠んだもののようにだ。まず初期形態から示しておきたい。

南なる黒野の上に

蠍の座おほらかに這ひ

きみが居るうしろの峯は

いま西の山なみのなか

まことなる誓ひをなして

重きせめ負ふわれなれば

ひとつまとなるらんきみを

このみちのほのにあかるく

すゝきいまうちひらめくは

東なる山地の上に

銅いろの月ぞ出でたる

をちこちの家のむねより

青じろくけぶりたてるは

ひとびとの野良をかへりて

いまをかも飯かしぐらし

すゝきみな露をうち吐き

なきいづる虫の音もあり

沢口たまみ（後掲）は、「歌稿〔B〕」の「169 南天の／蠍よもしなれ 魔ものならば／のちに血はとれまづ力欲し。」を関連歌として、賢治が盛岡中学を卒業し、岩手病院に入院した時、看護師に思いを寄せたことを詠んだのではないかとする。看護師への恋は「一百篇」の「公子」下書稿（一）によれば「父母もゆるさぬもゆる」とあり、「ひとつまとなるらんきみ」などといった気配は感じられない。ただ「公子」下書稿（一）の手入れ段階で「わが負へるつとめはおもし」とあって本作の「重きせめ負ふわれ」に酷似していることを思えば、この時の経験が元になっていたのかもしれない。

ただ「歌稿〔A〕」の、やはり同じ「大正三年四月」の項に収められている「198 いざよひの月はつめたきくだもの匂ひをはなち山を出でたり」も「月いざよへる」や「ひがしなる山彙の上に」といった句と共通するところもあり、どちらが原点なのか、なかなか限定する

のは難しいようだ。二つの短歌から発した、ということもあるのかもしれない。

また、下書稿(一)の手入れ段階で「まことなる誓ひをなして」を「あらたなる師に従ひて」と改める段階があることに着目すれば、この大正三年九月には盛岡の北山・報恩寺の尾崎文英を訪ねた時期であることから、尾崎との出会いを書いているのかもしれない。同年九月には、父・政次郎の元に高橋勘太郎から送られてきた島地大等編『漢和対照 妙法蓮華経』を読んで異常な感動を受けたというのも知られているとおりだが、編者の島地も、当時は盛岡の北山・願教寺の住職を務めていた。ただ、島地大等が「あらたなる師」でないのは、賢治が少年時代から面識があつたためである。もし「あらたなる」のモデルを求めるとすれば、『法華経』の意義を説いた日蓮をあてはめるべきか、とも思う。

さて賢治は下書稿(一)には複雑な手入れを施し、最終形態は次のようなものになっている。恋愛のテーマは第三段階めの鉛筆による手入れですっかり消えてしまっているが、①は第二段階の手入れの際の赤インクで付されており、この時までには恋愛詩で書きあげるつもりだったようである。

このみちのいつともしらね  
ほのあかりかもしいでしは  
たゞなづき高原の上に  
黄なる月いざよへるなり

露吐けるすゝきのむらと  
絶え／＼の虫のすだきに  
いまをかも人らいこはん  
おちこちの夕げのけむり

この後、二行だけ書かれた下書稿(二)を経て、下書稿(三)の初期形態では「なにをかもわがかなしまん」という句を挿入している。

このみちの醸すがごとく  
すゝきなどひかりいでしは  
ひがしなる山彙の上に  
黄なる月いざよへるなり  
なにをかもわがかなしまん  
すゝきの葉露をおとせり



夏の草山とになひて  
いましひと帰りきたるを

小林俊子（後掲）は次のように書いている。

四行二連の詩で、へなにをかもわがかなしまんは下書稿三最終形態から出現する。下書稿前半二節に人妻への思いを描いていたが、手入れ稿で三連からなる夕暮れの村の風景の詩となる。仕事から帰る人々の安堵の思いを感じて、自らのへかなしみを打ち消している。この行を足すことによって、農村の人々への思いを一層強く描き出している。付け加えられるへかなしみは、そのための技法としての意味を持つ。

たしかに、そのように読めもするが、「なにをかもわがかなしまん」というのは自らの悲しみを打ち消さなければいけない、と思っっているということであって、打ち消しおおせてはいないということだろう。

では、「わがかなしみ」とは何だったのろう。下書稿(一)に遡れば、恋の悩みであるのは明白だが、下書稿(一)の手入れ以降、一切、恋のテーマは登場しない。文語詩に恋を扱ったものは多くあることから、恋愛を扱っている

ということが削除の理由ではないだろう。つまり、賢治としては思うままにならない恋を悲しむのではなく、人々が夕餉のために家に向かい、野山にただ一人残された際のものがなしさを描くことに特化したということではなかったのだろうか。

秋の夕暮れ時と云えば、新古今和歌集に収められた三夕の歌が有名だ。

さびしさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮

寂連

心なき身にもあはれは知られけりしぎたつ沢の秋の夕ぐれ

西行

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ

藤原定家

賢治がこれらの歌を踏まえて書いたなどと言うつもりはないが、清少納言も『枕草子』で「秋は夕暮れ」と書いたように、人を詩人にするとも言われる秋に、賢治も自分なりの秋の詩を作ろうとしたようにも思えるのである。

## 先行研究

沢口たまみ「賢治をめぐる女性たち」(『宮沢賢治 愛のうた』盛岡出版コミュニケーション 平成二十二年四月)  
小林俊子「詩歌」『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』勉誠出版 平成二十三年八月)

## 75 駅長

ことごとと行く汽車のはて  
温石いしの萱山の  
上にひとつの松ありて  
あるひは雷にうたれしか  
三角標にまがへりと  
大上段に 真鍮の  
棒をかざしてさまよへり  
ごみのごとくにあきつとぶ  
高圧線のま下にて  
秋をさびしき白服の  
酒くせあしき土木技手  
いましも汽車を避けたへて  
こなたへ来るといまははた

急ぎガラスを入りにけり

### 大意

ことごとと走る汽車の終着駅では  
温石石のある萱山の  
頂上にある一本の松が  
あるいは雷が落ちることでもあったのか  
三角標に見間違えてしまうなど  
大上段に真鍮の  
通行票をかざしてホームを歩く  
ゴミのようにトンボがたくさん飛ぶ中を  
高圧線の真下で  
秋のさびしい白服を着て  
酒癖の悪い土木技手は  
ちやうど今汽車を避け終わって  
こちらに向かってやってくると思うと  
急いで駅舎のガラスを開けて入って来た

### モチーフ

「汽車のはて」を終着駅、また「温石いしの萱山」とあるのを五輪峠付近のことを指すのであったとすれば、延

伸途中であった岩手軽便鉄道の岩根橋駅での取材によるものだろう。駅長や土木技師が登場するが、鉄道趣味、温石石、三角標、見間違いというのはどれも賢治好みのアイテムであり、第三者風に作品を仕上げようという実験的な作品であったようにも思われる。

### 語注

汽車のはて 米地文夫（後掲）は本作を「温石（おんじやく）石とは一種の蛇紋岩で、この岩の多い北上山地中を走る岩手軽便鉄道沿線駅を詠った詩と思われる」としているが、おそらくそのとおりだろう。「はて」を終着駅を指すものだとすれば、岩手軽便鉄道の終着駅（始発を花巻とした場合）は、大正二年十月二十五日の段階では土沢駅、大正三年四月十六日には晴山駅、大正三年十二月十五日には岩根橋駅であった。大正四年十一月には岩根橋駅と柏木平間が開通し、これ以降の終着駅は仙人峠駅となる。蛇紋岩で有名なのは五輪峠や早池峰山だが、「温石いしの萱山の」という表現に似つかわしいのは、標高一九一七mの早池峰山ではなく、五輪峠であろう。また、後述する「高圧線」が岩根橋にあった発電所から電気を送るためのものだとすれば、やはり岩根橋駅がふさわしいということ

となりそうだ。大正時代には地方での鉄道整備が進んだが、岩手県内でも岩手軽便鉄道の他にも、賢治作品になじみの深い橋場線（現・田沢湖線）や東横黒線（現・北上線）、花巻電気軌道（廃線）などが開業し、賢治は新線が開業（区間開業を含む）するとすぐに乗りに行っていることが書簡や作品日付などから確認できる（信時哲郎「鉄道ファン・宮沢賢治 大正期・岩手県の鉄道開業日と賢治の動向」「賢治研究 96」宮沢賢治研究会 平成十七年七月）。そんな賢治だったので難工事の連続で、なかなか全通できなかった岩手軽便鉄道が、少しずつ営業区間を伸ばしていくことには大きな関心を抱いていたことが予想できる。大正四年八月二十九日には、盛岡高等農林学校の友人・高橋秀松に宛てて「今朝から十二里歩きました 鉄道工事で新しい岩石が沢山出てゐます」という書簡を遠野から送っているが、岩石採集という目的とは別に、鉄道の現場を見に行くつもりもあったのだろう。というのも、短編「化物工場」にも明らかのように、賢治は単に「乗り鉄」だというだけでなく、鉄道工事にも関心を持っていたことがわかるからである。本作の取材日がこの時だった可能性はあろう。岩手軽便鉄道の終着駅は、この頃、岩根橋駅であった。

温石いし 『日本大百科全書』の「温石」の項に「体を暖

める用具。蛇紋石（じやもんせき）などを温め、布や綿に包み、懐（ふところ）に入れる。軽石や滑石（かっせき）などを火で焼いたり、こんにやくを煮て、代用品にしたりした」とある。ここでは蛇紋岩のこと。蛇紋岩は蛇紋石を主成分とし、黒色や緑色がかつてすべすべしており、滑石や方解石、輝石などがまじりあつて美しい模様をなしていることから装飾や建築に用いられる。呼び名は蛇の皮のようでもあることから。岩手県内では早池峰山や五輪峠で採取できることが知られているが、五輪峠の蛇紋岩については、盛岡高等農林学校の友人・高橋秀松が「五輪峠では、蛇紋岩脈にハンマーを打ち入れ転び散る岩片を拾い乍ら、ホー、ホー二十万年もの間陽の目を見ずに居たので、みな驚いていると叫んでいた」（「賢さんの思い出（一）」 川原仁左エ門『宮沢賢治とその周辺』同刊行会 昭和四十七年五月）と書いている。おそらく大正六年八月末に江差郡土壤調査に行つた際の記憶であろう。賢治も高橋も盛岡高等農林学校に大正四年四月に入学しているが、『新校本全集 16（下）補遺・資料 補遺・伝記資料篇』によれば、一年の一期に、賢治のいた農学科二部でも、高橋のいた農学科一部でも「鉱物及び地質」二時間が必修科目としてあつた

ことが確認できる。賢治は大正四年八月に「鉄道工事で新しい岩石が沢山出てゐます」という内容の書簡を高橋に宛てて書いているが、習いたての知識をお互いに披露しあつていたのでろう。

**三角標** 賢治の造語だとされることもあつたが、米地（後掲）は以下のようにまとめている。「①「三角標」は賢治の造語ではなく、明治 20 年前後の数年間、現在の「三角点」に当たるものとして、公的に用いられたことのある術語である。／②その後、「三角標」は公的には用いられなくなつたが、民間では三角点、三角点標石、三角規標（測標）の総称として、あるいはその一部の名として「三角標」の語が用いられており、賢治も三角規標を「三角標」と呼んだ」とのこと、「かつて雷に打たれたらしい松の木を三角標すなわち三角規標と見間違えたというのである」とする。

**真鍮の棒** 銅と亜鉛の合金で、黄金色でさびにくく、細工がしやすいことから機械器具、日用品、美術品などに広く用いられる。第一連が作者である賢治の視点か、酒癖の悪い技手の視点か、それともタイトルにある駅長（または駅員）の視点かによつて、何を指していたのかの解釈が変わりそうだ。まず、賢治の視点であつたと考えると、土壤調査の際に用いる検土丈であ

った可能性がある。長さは1mほどにもなり、「霧降る萱の細みちに」（「未定稿」）に「検土の杖」として登場もしている。ただ、盛岡高等農林に入学直後の賢治は、まだ検土杖を持つてはいなかっただろうし、十二里もの距離を歩いたとは考えにくい。鉱物採取用のハンマーであれば持ってきた可能性はある。宮城一男（「『農民の地学者』としての生活」『宮沢賢治 農民の地学者』築地書館 昭和五十年一月）によれば、弟・清六が、賢治は六十センチほどもある採石用のハンマーを愛用していたのだと書かれていることから、このハンマーを真鍮の棒とした可能性も考えられる。しかし軽便鉄道の駅で「大上段に 真鍮の棒（ハンマー）をかざしてさまよへり」というのは、酔っていたにしてもあまりに物騒な行動である。土木技手であった可能性についてだが、二連になって「秋をさびしき白服の／酒くせあしき土木技手」と紹介されるよりも前に、土木技手が登場するのが不自然であるようにも思うが、「大上段に 真鍮の／棒をかざしてさまよへり」という描写と「酒くせあしき」は親和性が高い。また土木技手ということから軽便鉄道の延伸工事に携わった人物だと考えると、測量用のポールなどの「真鍮の棒」を持っていた可能性も出てくる。この人

物が、前行までの萱山の上にある松が測量の際に使う三角標のようだ、と見間違えた本人だとすれば、その説明も付けやすい。最後に駅長（または駅員）の視点であった可能性について考えると、『春と修羅（第一集）』の「青森挽歌」に車窓を眺めながら「黄いろなラムプがふたつ点き／せいたかくあほじろい駅長の／真鍮棒もみえなければ／じつは駅長のかげもないのだ」といった表現があり、これがヒントになるようにも思う。恩田逸夫（脚注『日本近代文学大系 36 高村光太郎・宮沢賢治』昭和四十六年六月）は、これを「単線鉄道で、駅長が機関士に渡す通行票。タブレットになる以前に用いられた真鍮製の棒。形や大きさはリレー競技用のバトンと似ている」と書いている。この棒（スタッフ）は、単線区間での衝突を防ぐための最も簡単な方式だが、ただ一つの棒を持つていないと通行できないため同方向から連続して通行することができない。そのために単線行き止まりの路線でのみ用いられることがあったものだが、その意味でも「汽車のはて」、つまり終着駅らしさの出る作品になったのだとも思われる。しかし、そこまでの「ことごとく行く汽車のはて／温石いしの萱山の／上にひとつの松ありて／あるひは雷にうたれしか／三角標にまがへり」と

というのは訪問者の視点であって、毎日ここで仕事を  
している駅長に、そのような感想を持たせるのは、や  
や不自然だ。ただ、不自然さが最も少ないという意味  
でスタッフ説を取り、本作を解釈してみることにする。

**あきつ** トンボの古名。その大群を「ごみのごとく」と  
いうのは身も蓋もない書き方のようにも思えるが、

「自由画検定委員」(『春と修羅(第一集)』補  
遺)にも「渡り鳥はごみのやうにそらに舞ひあがる  
し」とあることを思えば、親しみを込めた表現だと考  
えることもできそう。トンボは秋の季語で、「あき  
つ」を漢字で秋津と書いたことから分かるように秋  
をイメージさせるが、「秋をさびしき白服の」とも季  
節が一致する。高橋秀松に送った書簡の日付は八月二  
十九日であったが、岩手県であればもう、暦の上だけ  
でなく(暦で言えば新暦の八月七日頃には「立秋」と  
なる)、体感でも秋と言ってもよい時期であったよう  
に思う。

**高圧線** 高圧電圧を送るための送電線路のこと。岩根橋  
駅前には発電所があり、浜垣誠司のブログ「宮沢賢治  
の詩の世界」(「岩根橋発電所跡」[https://ihatov.](https://ihatov.co/)

cc/平成十九年三月二十一日)によれば、跡地には大  
正七年十一月に書かれたという「岩根橋発電所記念

碑」があり、そこには「大正六年三月エヲ起シ翌七年  
十一月竣成ス」と書いてあるという。この電気を使っ  
てカーバイドを作る工場が岩根橋にあり、賢治も「カ  
ーバイト倉庫」(『春と修羅(第一集)』)を書いて  
いる。ただ、発電所が大正六年の起工であるとする

と、岩手軽便鉄道は大正四年十一月には仙人峠駅まで  
開業してしまっており、岩根橋駅はもう終着駅ではな  
くなくなってしまっている。ただ『定本語彙辞典』には盛  
岡電灯株式会社が明治四十年にカーバイド生産のため  
の岩根橋工場を設立したと紹介されていることから  
(なお同辞典は出典である日本カーバイド工業の『カ  
ーバイド工業の歩み』について一九一〇(明治四十  
三)年の刊行としているが、正しくは一九六八(昭和  
四十三)年であり、明治と昭和を間違えたものと思わ  
れる)、既に何らかの発電施設がここにあったようであ  
る。出典である『カーバイド工業の歩み』にあたっ  
てみると、明治四十一年にはカーバイドの産出が四十  
二トン、明治四十二年に八十六トン、明治四十三年に  
六十五トン、明治四十四年に五十二トン、明治四十五  
年に五十二トンといったデータも示してあった。『岩  
手近代百年史』によれば「電気企業の展開」として盛  
岡電気会社が明治末年に供給電力を増やし、「明治四

十一年には上閉伊郡岩根橋に「カーバイト」製造工場を設け」と書いてあり、『カーバイト工業の歩み』と明治四十年と四十一年の差はあるものの、岩手軽便鉄道が岩根橋を終点としていた頃には、すでに発電の施設もあり、高圧線もあったものと推測できる。

**土木技手** 旧制度下の官吏で技師の下に属する判任官または判任官待遇者のこと。会社でも技師の下に技手が置かれることもあった。「ぎし」と「ぎしゅ」が紛らわしいことから、技手のことを「ぎて」と呼び分けることもあった。ここでは軽便鉄道の延伸のための技手であろう（あるいは発電所やカーバイト工場に関連した技手か）。

## 評釈

黄罨（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（タイトルは「駅長」）一種が現存。大きな手入れは行われていない。モデル地や取材日については語注に書いたとおりで、まだ岩手軽便鉄道が全線開業（とはいえ今日の釜石線の終点である釜石まで開業するのは戦後の昭和二十五年。それまでは仙人峠駅（廃駅）が終点であった）していない時期の取材だと思われる。賢治は時間を見つけては鉄道に乗ってあちこちに赴いたが、年譜等で確認できる限

りで岩手軽便鉄道の当時の終点に行った記録としては、盛岡高等農林学校の友人・高橋秀松に送った大正四年八月二十九日の書簡に「今朝から十二里歩きました。鉄道工事で新しい岩石が沢山出てゐます」と書いた時ではないかと思われる。この頃の終点であった岩根橋駅は、温石石（蛇紋岩）の露頭のある五輪峠にも近く、また盛岡電気会社が発電所を設置しており、カーバイト工場も稼働し始めていたため、高圧線があつたとしても不自然ではない。

ただ賢治は今日でいうところの鉄道ファンとも言うべき心性を持ち、行動をとった人物であつたと思われることから、岩石採取だけを目的として遠野まで足を延ばしたと考えない方がよいように思う

（「鉄道ファン・宮沢賢治 大正期・岩手県の鉄道開業日と賢治の動向」（「賢治研究 96」宮沢賢治研究会 平成十七年七月）。とはいえ賢治は現在の鉄道ファンたちが車両や駅などに興味を持つのは少し異なり、大自然の中を鐵路が少しずつ伸びていくことに関心を示したようである。例えば橋場線の延長工事にも非常に興味を持っていた。例えば橋場線の延長工事を描く短編「化物丁場」にそれは表れており、また、この短編の取材地である東横黒線も執筆当時は延長

途中で、「西の仙人鉾山に、小さな用事がありました」とあるのも、トンネル続きの難工事をイギリスから輸入した削岩機で乗り越えようとしている時期であり、賢治はその様子を見にいかうとしたのではないかと考えられることから、高橋に宛てて「鉄道工事で新しい岩石が沢山出てゐる」という発見と喜びは、鉄道ファンのものであると同時に、「石コ賢さ」とも呼ばれたという岩石好きの興味をも満足させたものだったのだろう。

そして鉄道工夫や運転手、機関手にも興味を抱いていたことは、今日の鉄道ファンと少し異なっている。工夫への視線としては、文語詩「化物工場」（「二百篇」）や「歌稿〔A〕」の30などで、「赤毛布シャツにつくりし鉄道工夫」と工夫の服装にも目を配り、また、「岩手軽便鉄道七月（ジャズ）」（「春と修羅（第二集）」）で「布佐機関手」を登場させたり散文「氷と後光」では、東北本線最大の勾配のある十三本峠という難所を越えることを山場としてもいる（信時哲郎「鉄道ファン」・宮沢賢治 再説）

「宮沢賢治研究 Annual32」宮沢賢治学会イーハトーブゼンター 令和四年三月）。

賢治の文語詩は岩手に生きる様々な人を描くのが大きなテーマになっているように思うが、本作では岩手軽便

鉄道とその駅を描くだけでなく、土木技手や駅長にも注目しているあたりは、賢治自身の鉄道趣味も加わっていたように思われる。

さて、第一連から読んでいきたい。一行目については述べてきた通りだが、二行目からは少し難解だ。温石石の萱山の上に松があり、「雷に打たれたのだろうか、三角標に見間違えられた」といった意味であり、必ずしも難解ではない。ただ、問題なのは、これが誰の視点なのか、という点である。山の上の松の木を三角標に見間違える、といったことは、誰にも起こりえることだが、そうしたことをわざわざ口に出して言うことは少ない。誰かと一緒にあれば、そんな会話を交わすこともあるかもしれないが、誰かがいるようには読み取れない。ただ二連に「酒くせあしき土木技手」とあることから、酔っぱらって「土木技手」なる人物が独り言を言っているという事ならば、そう理解できないことはない。駅長の独り言だと解することもできなくはないが、毎日、ここで仕事をしている駅長が今さらこのようなことを、しかもわざわざ独り言として呟くということは、ありえないことではないが不自然である。

ただ、さらに気になるのは温石石の山も三角標も賢治好みのものでありすぎることだ。温石石は「五輪



峠」（「五十篇」）の下書稿に登場するだけでなく、友人の高橋秀松が「五輪峠では、蛇紋岩脈にハンマーを打ち入れ転び散る岩片を拾い乍ら、ホー、ホー二十万年もの間陽の目を見ずに居たので、みな驚いていると叫んでいた」（「賢さんの思い出（一）」川原仁左エ門『宮沢賢治とその周辺』同刊行会 昭和四十七年五月）とも書かれている。三角標も詩篇「三原三部」や「銀河鉄道の夜」に何度も登場する語である。

また見間違いや見誤りについても、賢治好みのモチーフである。例えば「五輪峠」（「五十篇」）では、「五輪峠と名づけしは、地輪水輪また火風、／（巖のむらと雪の松） 峠五つの故ならず。」とあり、五輪峠の名前の由来が峠が五つあるためではなく、五輪塔があるためだったという自分の思い違いの経験が主題になっているし、未定稿の「宗谷（二）」では、日の出の太陽を見誤った紳士の様子が描かれていた。

つまり第三者である土木技手や駅長が見間違いをしたように書いてはいるものの、実際は賢治自身の経験と感想が、第三者に託されて表現されているとすべきかと思われる。

こうした例には、「二百篇」の「岩頸列」があり、ここでは岩頸の山が「によきによきと」伸びているように感じ

られたという旅役者の芝雀なる人物に述懐させているが、岩頸の山が伸びていくように感じるとするのは、鈴木健司が『宮沢賢治文学における地学的想像力Ⅱ 岩頸表象の検証と精神医学的接近』（蒼丘書林 令和四年八月）などで岩頸表象として論じているような賢治独特の感覚であつて、同じ感覚の持ち主が存在しないとは言えないにしても、第三者に託して描いたものと解するのが自然だろう。

本作に登場するのは岩頸が伸びていくといったような驚くべき景観というわけではないが、自分史として文語詩を編むのではなく、第三人称的な視点で書いていこうとしていたために起こったのではないかと思われる。

「二百篇」の「厩肥をになひていくそたび」「下書稿（一）」に、「一人称にて甘きもの 三人称にてなすとき 応々奇異なる真美を生ずることあり」と書き付けていたが、自分自身の発見を描くのではなく、それを第三者のもののようにして書くことが効果的だと思つて、このような方法を取つた、ということだったのかもしれない。

第一連に冠する記述が長くなつたが、次いで第二連について見ていきたい。

まず上空に「ごみのごとくにあきつとぶ」とあり、そこには「高圧線」も張られていると続けられる。その下に「さびしき白服」の土木技手がいるというのだが、小林俊

子（後掲）によれば、この「さびしき」とは、「秋に至っても夏服を着た酒癖の悪い土木技手を象徴する言葉か」とのことであるが、七五調に文字数を整えるために持ち出されただけの言葉であるように思えなくもない。

「酒くせ悪しき」については、第一連の真鍮の棒を一段に構えながら千鳥足で歩くことを意味するのかもしれないが、「いましも汽車を避けたへて」ともあるように、よろよろとして汽車からまともに離れることもできない様子を言うのかとも思う（あるいはそれらの両方か）。

そして最後から二行めで「こなたへ来るといまははた」というのは、土木技手の行動だろうが、「こなた」というのは、土木技手のいる「あなた」（あちら）ではなく、近い側を指しており、そこには土木技手の動きを見ている人物が想定されている。おそらくはそれが視点人物であった賢治なのだろうが、もしかしたらタイトルにだけ登場してテキスト上に姿を見せていなかったとも捉えうる駅長なのかもしれない（もしも第一連で「真鍮の／棒をかざし」たのが駅長でないのならば）。

続く「急ぎガラスを入りにけり」も、おそらく賢治か駅長かがいる駅舎のガラス扉を開けて、土木技手が中に入って来たということなのだろう。「こなた」というの

は、駅舎の側ということになりそうだが、現在の岩根橋駅は駅舎もなく、ただホームに待合室があるのみである。駅長どころか駅員もない。終着駅だった頃の岩根橋駅の写真を見つけたことはできなかったが、「歩王あむきんぐのLet'sらGol」<https://ameblo.jp/aru-king/entry-175335559.html>）というブログの平成二十八年六月二十九日の記事によれば、「岩根橋駅が無人駅化されたのは昭和60年のことで、／それ以前は、現在は自転車置き場がある辺りの空き地に／木造駅舎があったようです」とのことなので、終着駅だった当時間も駅舎があり、駅長がいた可能性がある。

駅長が駅舎にいたのか、それとも真鍮のスタッフを持っていたのかは判断しにくいだが、読者に鉄道に関する知識がないとわからないにせよ、賢治としては「真鍮の棒」という語から、すぐさま閉塞区間ならではのスタッフであると判断させ、駅長の所作を思い浮かべさせようとしたのかと思われる。スタッフではなくタブレットを用いていたと思われる詩句「シグナルもタブレットもあつたもんでなく」が「三六九 岩手軽便鉄道 七月（ジャズ）一九二五、七、一九、」にあることを思えば、こう解釈すべきなのかもしれない。

いずれにせよ本作は鉄道趣味、温石石、三角標、見間違いといった賢治が興味を持ったものが合流したところに生まれたもののように、視点人物の経験や感想を第三者のものとして書いてみたり、タイトルのみに登場しながら明瞭に姿を現さない人物を扱うなど、なかなかの意欲作であったとすべきなのだろう。しかし、こうした実験が功を奏したのかと言えば、原稿に〇さえ付されることのない未定稿に留まったことを思えば、満足する結果とはならなかったようである。

#### 先行研究

小林俊子「詩歌」(『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』勉誠出版 平成二十三年八月)

米地文夫「銀河鉄道の夜」の用語「三角標」の謎 宮沢賢治の地図や測量への関心をめぐって」(『総合政策 13—2』岩手県立大学総合政策学会 平成二十四年五月)

76 「ははドロミット洞窟の」

こはドロミット洞窟の  
け寒く硬き床なるを

幾箇の環を嵌められし  
巨人の白き隻脚ぞ  
かくて十二の十年は  
事なきさまに燃え過ぐる

ここはドロマイト大理石でできた洞窟で  
寒々と硬い床板が敷き詰められているが  
幾つもの環を嵌められて  
巨人の白い片脚が繋がれている  
こうして大正十二年の後の十年も  
何事もないかのように街は燃え過ぎてしまった

#### 大意

モチーフ

ドロミット洞窟とは、おそらくは大理石張りの豪華な部屋であろう。隻脚の巨人が環を嵌められて動けないままだ、というのは近代文明批判の詩なのである。末尾の二行は手入れ段階で書き足されているが「(大正)十

二」年に東京の街が「燃え過」ぎた関東大震災についての印象を書き付けていたのかもしれない。

### 語注

**ドロミット洞窟** ドロミットはドロマイト（苦灰石、白雲石）のこと。『定本語彙辞典』には「ドロマイトのドイツ語 (Dromit) 読みと思われる」とあるが、ゲ・フォルトマン『重量分析実験指導』（慶松勝左衛門 明治三十五年四月）をはじめ「ドロマイト」の用例も多く見つかったので、特に誤用や誤訳というわけではない。『定本語彙辞典』では、また「日本では栃木県佐野市葛生<sup>くさ</sup>のドロマイト鉱床が有名。なお、ドロミット洞窟は雨水等の浸食現象によってできたドロマイト層の洞窟。ノート「東京」に「こはドロミット洞窟の／つめたく淡き床にあらずや」（「東京」）」とある。鍾乳洞のイメージともあるが、東京滞在中の感想などを書いた「東京」ノートを先行形態としていることから、洞窟とあるのは一種の見立てだと考える方がよいように思う。「三〇一 秋と負債 一九二四、九、一六、」（「春と修羅 第二集」）には「これら二つの光の交叉のほかに／もひとつ見えない第三種の照射があつて／このなめらかな白雲石<sup>ドロミット</sup>の床に／

わたくしの影を花蓋のかたちに投げてゐる」とあるが、ここで「白雲石の床」とあるのは白雲大理石（ドロマイト・マーブル）であろう。大理石と言えば、百貨店などの装飾に用いられており、たとえば大正三年に新築された三越日本橋本店の中央広間について「中央階段前に在りて奥行十間、幅六間十基の大柱に依て囲まれ柱上に飾られたる遊戯せる児童の石膏像は東京美術学校教授沼田一雅氏の作なり」（「三越4-10」三越呉服店 大正三年九月）とあるので、このような大理石がふんだんに使われた屋内空間を賢治が「ドロミット洞窟」とした可能性はあるだろう。三越本店は関東大震災で大きな被害を受け、大正十三年一月に起工、昭和二年三月に竣工するが、小松徹三（「震災から復興まで」『大三越の歴史』百貨店日日新聞社出版部 昭和十六年五月）は「一階売場は白大理石貼りとし、その他特殊の床にはゴム貼り又はモザイクタイルを用ひた」と書いている。

**巨人の白き隻脚** 「幾箇の環」を嵌められた巨人というと、ギリシヤ神話に登場する男神・プロメテウスを想像するが、「隻脚」（片脚）であつたという記述はない。隻脚といえば、近代日本においては明治二十二年に玄洋社の来島恒喜によるテロで片脚を失った政治

家・大隈重信が浮かぶが、早稲田大学の大隈像などは両脚で立った姿になっており、また、大隈像は白くないし、「環を嵌められ」ているわけでもない。三越日本橋本店には店の入り口にライオンがいるだけでなく、商業の守護神であるヘルメス像があり、片脚を挙げていることから「隻脚」と言えないこともないが、ブロンズ製であり「白き」という形容にはあてはまらない。ただ、中央広間には「中央階段前に在りて奥行十間、幅六間十基の大柱に依て囲まれ柱上に飾られたる遊戯せる児童の石膏像は東京美術学校教授沼田一雅氏の作なり」（「三越4—10」前掲）とあるように、石膏による像が飾られていたようで、「隻脚」の児童像があつたかどうか、また「環を嵌められ」ていたのかどうかは定かではないものの、こうした像が百貨店などにあつた可能性はあろう。また「幾箇の環を嵌められし」を重視すれば、東京教育博物館（現・国立科学博物館。大正十年六月から東京博物館に改称）に展示されていた骨格標本のことを言ったのかもしれないし、ここならば片脚の巨人の標本もあつたかもしれない。東京博物館は関東大震災で施設と資料の全てを失うが、昭和三年に上野新館が起工。竣工は昭和五年十

二月で、これが現在も日本館として親しまれている建物だが、大理石もふんだんに用いられているという。

#### 評釈

「東京」ノート」に書かれた下書稿(一)、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿(二)の二種が現存。

「未定稿」のうちでもかなり解釈の難しい文語詩の一つではないかと思われる。松田司郎（後掲）は、「真相の旅の果てに、賢治は自らの心象の燐光盤に、自身が〈巨人〉となつて、石灰岩質の〈洞窟〉の冷たく硬い床に、〈脚〉に〈幾箇の環を嵌められ〉て監禁されているのを目撃する」と読んでいる。ただ、本稿では「東京」ノート」に発するものであることから、東京での見聞に基づくものだととして考察を試みたい。下書稿(一)は次のとおり。

こはドロミット洞窟の

つめたく硬き床にあらずや

さるにてもいま

幾箇の環を嵌められしども

巨人の白く光る隻脚

下書稿(二)では最後に二行が付け加えられている。改稿の過程も含めて、書き出してみることにする。

こはドロミット洞窟の

つめたく硬き床』にあらざや↓なれや』↓け寒く硬き

床な『れる↓るを』

幾箇の環を嵌められし『ぞも↓削』

巨人の白『くひかる隻脚↓き隻脚ぞ』『も↓削』

かくて『西紀の↓十二の』『一↓十↓削』十年は

事なきさまに燃え『去↓削』過ぐる

語注にも書いたように、第一連と第二連は、大理石(あるいは白雲大理石)をふんだんに使った百貨店か博物館。いずれにせよ、近代的で、豪華な様子を描いているのだろう。「春と修羅 第二集」の「三〇一 秋と負債 一九二四、九、一六、」でも、「これら二つの光の交叉のほかに／もひとつ見えない第三種の照射があつて／このなめらかな白雲石ドロミットの床に／わたくしの影を花盞のかたちに投げてゐる」と書いているが、こちらはイメージ

の中での大理石だが、本作では実際に見たものを描いたのだと思われる。

下書稿(一)には「さるにてもいま」とあつたが、その近代的で豪華な中であつても、巨人の白い隻脚は環を嵌められて、どうやら動くこともできない、ということのようだ。具体的に何を示しているのかは分からないが、豪華な近代文明の中で、縛り付けられている不幸な存在を象徴しているのかもしれない。

書き加えられた最終連には何が書かれているのかと言えば、はじめ「西紀の」、つまり西暦と書かれた後、原稿コピーを見ると「西紀」を線で抹消し、その横に「十二」と書き替えているのが確認できるが、そうなるのと、この「十二」も年号を済めしていると考えるのが普通だろう。そして、これが西暦ではないのだとすれば、和暦の「十二」、つまり「大正十二年」を意味するのではないかと考えることができる。

その次の行には「燃え過ぐる」とあるが、大正十二年に燃え過ぎたもの(あるいは燃え去ったもの)といえば、東京の街の中心部を焼き尽くした関東大震災が思い出される。

関東大震災は東京市日本橋区の一〇〇%、浅草区の九六%、本所区の九五%、神田区の九四%、京橋区の八六%を焼き尽くしたが、大正十年に花巻から上京し、賢

治は一年ほど東京に住んだが、台地であった本郷や上野はあまり火事の影響を受けなかったものの、慣れ親しんだ浅草や神田などは、まさに「燃え過」ぎてしまった。

本作の下書稿(一)は「東京」ノート」の「一九二一年一月より八月に至るうち」とある項に収められていることから、大正十年の家出上京中の経験だったことになり、関東大震災の記憶は含まれないもののように思えるが、ノートの成立は昭和五年以降、また、黄野(22<sup>0</sup>行)詩稿用紙に書かれたのは、さらにその後であり、手入れについては、もつと時代を下ることになる。とすれば、この想定もあながち間違いだとは言えないように思う。

関東大震災について賢治が直接に言及することは少ないが、例えば震災直後の大正十三年九月十六日の日付を持つ「宗教風の恋」で「東京の避難者たちは半分脳膜炎になつて／いまでもまいにち遁げて来るのに」と書き、また同一日付の「昂」で「東京はいま生きるか死ぬかの堺なのだ」とも書いている(ともに『春と修羅(第一集)』)。ただ栗原敦(「風景とオルゴール」の章に連作)『宮沢賢治 透明な軌道の上から』新宿書房 平成四年八月)は、日蓮が正嘉元年の大地震と打ち続く災厄をきっかけにして『立正安国論』を執筆し、幕府への諫言を行ったことを賢治は強く意識していたとし、また

『春と修羅(第一集)』が編集の途中で大きく性格が変わった理由についても関東大震災の影響が大きいのではないかとしていることを考慮に入れれば、「東京」ノート」で震災に触れたとしても不思議ではないだろう。さて、では、この後の「十二の十年は」はどう捉えるべきだろう。「事なきさまに燃え過ぐる」から考えれば、あれだけの大惨事だったというのに、大正十二年からの十年ほどは「何事もなかったかのように過ぎてしまった」と、いうことになるのだろうか。

大正十二年から十年後と言えば、最晩年の昭和八年だということになる。賢治が最後に東京滞在したのは昭和六年九月であるが、おおざっぱに言つて十年であり、賢治が昭和六年の東京を思い出しながら付け加えたのだと考えることも可能だろう。

推測に推測を重ねる評釈となつてしまつたが、これまでに述べてきたことをまとめてみるとこんな意味になる。東京は近代化を一層進め、栄華を極めているようだが、その元では縛られ、動けないでいる人々も存在する。大震災で、東京の街は焼き尽くされたが、しかし十年も経つた今になつても、変わるべきところは何も変わっていない……

東京市日本橋区で生まれ育った谷崎潤一郎は、箱根で震災に遭うと、その後は家族を連れて関西に移住。東京に戻ろうにも、もうかつての東京が蘇ることもないだろうと諦め、ずっと関西に住み続けた。昭和四年七月に谷崎は「岡本にて」で次のように書いている。

震災の明くる年の九月に芦屋へ逃げて来て、その翌年の春今の岡本へ家を持ったのは、つい此の間のやうな気がするのだが、もう足かけ六年になる。実際早いものだなと思ふ。それでも最初は決して此処にゐつく気はなく、早くて五年、晩くも十年以内には東京が復興するだらう。まあそれまでの腰かけと云ふつもりだったが、その後時々上京してみると、復興どころか益々乱脈に、木ツ葉みたいなバラック建が殖えるばかりなのに、あのあんばいでは十年はおろか、二十年たつても、とてもムヅカシイと愛想をつかして次第に尻が落ちついてしまった。

江戸っ子の谷崎にとっては、変り果てた東京になど、もう戻りたくもないということなのだろうが、上京者であつた賢治にとっては、変わるべきところが変わつていない、というように思えたのかもしれない。

本作は、①が付せられることもなく未定稿に留め置かれているが、それは「東京」ノートに収められ、文語詩化が試みられながらも、定稿化されることもなく終わった他の多くの作品と同じである。ただもしも本稿で提案したように関東大震災後の東京について書いたものであつたとすると、賢治の東京意識を考えるうえで興味深く、また、地方出身の詩人の目に震災後の東京がどう見えたのかという東京論としても興味深い作品だということになるかもしれない。

#### 先行研究

松田司郎「プレオシスの鎖 賢治とユングの〈生〉の証明1」 「ワルトラワラ 34」ワルトラワラの会 平成二十四年四月)

#### 77 秘境

漢子 称して秘処といふ  
その崖下にたどりしに  
樺柏に囲まれて  
ほうきだけこそうち群れぬ



漢子 首巾をきと結ひて  
黄ばめるものは熟したり  
なほそを集へわれはたゞ  
白きを得んと気おひ云ふ

漢子が黒き双の脚  
大コムパスのさまなして  
草地の黄金をみだるれば  
峯の火口に風鳴りぬ

漢子は蕈を山と負ひ  
首巾をやゝにめぐらしつ  
東に青き野をのぞみ  
にと笑みにつゝ先立ちぬ

### 大意

男が秘処であると称した  
その崖の下に辿り着くと  
樺の木と柏の木に囲まれて  
ホウキダケが群生していた

男は首巾をきつと結んで  
黄ばんだものは熟している  
お前はそれを集めなさい私はただ  
白いのを探そうと気負つて言う

男の黒い二本の脚は  
大きなコンパスのように  
金色の草地をかき乱すと  
峯の火口にも風が鳴り響いた

男は山のようにキノコを背負つて  
だんだんに首巾を巻き付けながら  
東に広がる青い野原を眺め  
ニツと笑みを浮かべながら先立つて行つた

### モチーフ

童話「谷」の前半と内容が重なっている。「漢子」は、  
自分だけ白い新しい蕈を取りながら、「な」には黄ばん  
だ古い蕈を押し付けるといふ小悪党だが、どこかヒーロ  
ーめいた描き方がなされている。「五十篇」には、密通  
しようという妻がヒロイン視されて描かれる。「そのと  
きに酒代つくと」があるが、テーマやモチーフに重

なる部分もあることから、「対」の作品として「一百篇」に収めるつもりがあったのかもしれない。下書き段階に「まがつみ」という「一百篇」にしか登場しない語が登場することからも「一百篇」に載る可能性があったと考えることもできそうだ。

### 語注

**漢子** 男子のこと。読み方は「かんし」だが、ここでは賢治がルビを振っているように「をのこ」と読ませたかったのだろう。葦の採れる場所を案内しながらも、「な」に対しては「黄ばめる」葦を取らせ、「われ」は新しい白い葦を取るのだとする小悪党。『日本国語大辞典』によれば「男をいやしめていうときにも用いる」ともあるが、「黒き双の脚／大コムパスのさまざま／草地の黄金をみだるれば」や、「首巾をやゝにめぐらしつ／東に青き野をのぞみ／にと笑みにつゝ先立ちぬ」といった詩句からは、むしろヒーローを描いているようにも感じられる。

**秘処** 葦の採れる秘密の場所のこと。葦が取れる場所について北海道上富良野町の大正九年三月十五日生まれだという高橋七郎（きのこ談義 <https://www.town.kami-furano.hokkaido.jp/hp/saguru/0809takahashi.htm>)

は、「親、兄弟にも教えない、キノコ採りの穴場とでも云う場所」だと語っており、また、「読売新聞」（令和三年九月二十九日）の記事に「キノコ採りは、「自分だけの穴場」を他人に知られたくないため、詳しい行き先を告げず、1人で入山するケースが多い」ともあった。異例の事態であったのだろう。板谷英紀（「キノコ」

『賢治博物誌』れんが書房新社 昭和五十四年七月）によれば、「宮沢清六氏におうかがいしたところ、賢治はキノコ採りはあまり得意ではなかったとのことですから、この話（「谷」…信時注）は実際の経験にもとづくものかも知れません」とのこと。

**ほうきだけ** 『定本語彙辞典』には「ねずみたけ、とも、食用キノコとしては上等種。色と形によつては有毒種もある。方言でネッコモタシ、ホンモタシ、ホウキモタシ、ハキボ（モ）ダシ等々。根もと（石突き）が白色の太い柄で上の方は先端部にかけて箒状の海のサンゴのように淡紅色に分岐する。高さ八〜二〇cm」とある。関連作品である童話「谷」では「はぎぼだし」と表記されている。

### 評釈

黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（一）（タイトルは「秘境」、その下部余白に書かれた下書稿（二）（タイトルは「秘境」。右肩に赤インクで㊦）の二種が現存。『新校本全集』には童話「谷」が関連作品であると書かれている。

下書稿（一）の初期形態から示すことにする。

谷の上の秘処に來りて  
その漢子 蒼穹そらに息せり  
秋の陽は草にかゞよひ  
ほうきだけをちこち群れぬ

黄ばめるは熟したるもの  
きみとりてまちにもたらせ  
白きにはきみな手ふれそ  
漬けてわが辛く喰みなん

鬱金をばきと結ひしめて  
その漢子頸をあくれば  
焼石の峯に風鳴り  
樺樺うちきらめきぬ

まくろなる麻のもも引き  
真鍮のひかりをみだし  
その漢子たゞひとりして  
あたらしきよきをあつめぬ

きららかに風は來りて  
樺柏かへくさんと鳴り  
漢子またそらに息して  
はるかなる野をのぞみけり

かしこにぞまがつみはあれ  
塩魚の頭を食みて  
わが妻のもだえ死せしに  
われ三月囚へられにき

山なせる蕈をになひて  
鬱金をばきと結ひ直し  
その漢子われをひきひて  
その谷の秘処を去りにき

童話「谷」は大正十二年頃に書かれたとされる小品で、原稿には「村童スケッチ／内容希薄」とも書かれているという。こんな話である。

小学校の三・四年生の「私」が野葡萄を食べていると馬番の理助が通りかかり「蕈のうんと出来る処へ連れてってやらうか」と誘う。足早な理助に必死についていくと「はぎぼだし」（ほうきだけ）がそここに生えていた。理助は「白いの硬くて筋が多くてだめだよ。茶いろのをとれ」と命じ、私はそれに応じる。理助は白い蕈ばかり取るので「お前はなぜ白いのばかりとるの」と尋ねると、「おれのは漬物だよ。お前のうちぢや蕈の漬物なんか喰べないだらうから茶いろのを持って行った方がいゝやな」と理助は答える。私はなるほどと納得したので、少し理助のことを気の毒に思いながら、茶いろの蕈ばかり取る。二人が蕈を取り終えると、理助は檜渡の赤い崖を見せ、私は頭がしいんとなるような恐怖を感じる。「ひとりで来ちゃきつとこゝへ落ちるから来年でもいつでもひとりで来ちゃいけないぞ」「第一みちがわかるまい」と告げ、二人は帰路に就く。私は大威張りで家に戻るが、兄に「どうしてこんな古いきのこばかりとって来たんだ」と窘められ、理助に言われたからだと答えると、「理助かい、あいつはずるさ」と兄は応じる。次

の春には理助は北海道の牧場に行ってしまったため、私のはあの蕈は自分のものだと確信する。以上が前半である。

後半には、次の年になって、私は友人の藤原慶次郎と蕈取りに出かけ、崖でコダマが返ってくるのが面白く、悪乗りして「馬鹿野郎」と怒鳴ったところ、その時は、はつきりした答えが戻ってこず、怖くなって二人は逃げるように家に戻る。その次の年には私は兄たちと蕈取りに行くようになった、という話である。

未定稿の「エレキに魚をとるのみか」は童話「鳥をとるやなぎ」を文語詩化したもので、この童話にも藤原慶次郎（盛岡中学校時代の友人・藤原健次郎がモデルではないかと指摘されている）も登場することから、一種の連作的な趣があるように感じられる。ただ、文語詩「秘境」には「谷」の後半は全く登場せず、藤原慶次郎の出番もない。そして、これら村の子どもたちの自然に対する興味と畏怖を描いた童話の重要な要素である自然への畏怖、そして子どもが（少なくとも表面には）登場しておらず、この点では「エレキに魚をとるのみか」で、鳥を電気で吸い寄せているのではないかといった子どもの発想が生かされているのと比べるとだいぶ異なるように思われる。



薩峠の歌」まで書いていた。文語詩は総体的には弱い者、忘れられがちな存在に目を向け、大きな権限を持つ者やそうした社会構造を批判する傾向があるが、登場人物の非社会性や非倫理性を清濁併せのんで肯定的に描いたという意味では、異色の作品だということになるかもしれない。

三宅岳（後掲）は、理助が村落共同体に属する人間ではなく、「蕈の漬物を作らなければ冬を越せない貧しい層に属する」人間だとする。一方で「私」は「羽織をぬいで草に敷きました」というように羽織を着るような裕福な層の人間であり、蕈の漬物を作るのだと語る理助の言葉に対して「理助を気の毒なやうな気」がしている。三宅はそんな理助だからこそ「村の中で忌避されている自分と付き合ってくれる人間をどこか求めていたのではないか」とするのだが、確かに「尋常三年生か四年生」である「私」が、大人である理助に対して「お前」と呼んでいるのも、二人の属する世界の違いを示しているようでもあり、そうしてみると、騙した理助と騙された私の、どちらが「気の毒」な存在で、社会的な弱者であったのか、逆転して考えた方がよいようにも思えてくる。童話「山男の四月」では、六神丸の行商をしている支那人の陳が山男を騙して六神丸に変えてしまう。六神丸

にさせられてしまった山男は「町へはいったら、おれはすぐ、この支那人はあやしいやつだどどなってやる」と言うと、陳はしんと黙ってしまふ。すると、山男は陳が泣いているのではないかと想像し、すっかり「（陳が）かあいさうになつて、いまのはうそだよと云はう」とまで思つてしまふ。童話であり、山男の見た夢の中の話ではあるが、騙されていながらも、山男は相当の好みに設定されている。これを思い浮かべてみれば、古い蕈を取らされたことよりも、一緒に「秘処」の蕈取りにつれ出してくれたことの方を評価しろ、ということだったのかもしれない。

また下書稿(一)には、こんな件りもあつた。この男は、「塩魚の頭を食みて／わが妻のもだえ死せしに／われ三月囚へられにき」といった過去があつたというのである。腐つた魚を食べて妻が死に、殺人の容疑で三ヶ月も囚われたというのは悲劇でしかない。妻を失つた悲しみもさることながら、その悲しみに浸ることすら許されず、犯罪者扱いにされ収監されたというのだ。

おそらく賢治は、この「漢子」が悪人ではなく、気の毒な、「かあいさう」な存在であることを強く印象付けるために付け加えたのかと思われるが、この内容については、榊昌子（後掲）また「柳沢」（『宮沢賢治「初期

短篇綴」の世界』無明舎出版 平成十二年六月）にも関連する記述がある）や岡沢敏男（後掲）が指摘するように、岩手山に登る際に賢治が何度か利用した柳沢の宿（岩鷲ホテル）のできごとと関連がありそうだ。

大正六年七月、柳沢にできたばかりの旅宿で、腐った沼貝を食べたために旅宿主をはじめとした四名が死ぬという事件があった。さらに、その旅宿の未亡人が大正八年七月には、内縁の夫が嫉妬から喉を鎌で切る付けられるという事件が起こっている。賢治は大正九年九月に妹のシゲ、クニを連れて岩手山に登った際、「アソコの宿のおかみさんが殺されたよということを知かされまし

た」（森荘巳池「賢治の妹さんから聞いたこと」『宮沢賢治の肖像』津軽書店 昭和四十九年十月）と妹に語っていたという（実際は未遂であった）。  
これら一連の経験が短篇「柳沢」に生かされ、童話「かしはばやし」の夜」や童話「葡萄水」、また、文語詩未定稿の本作や「五十篇」の「[そのときに酒代つくると]」や「[月のほのかたむけて]」などにも生かされている。

また「柳沢」では「首に鬱金を巻きつけた旭川の兵隊上り」が登場しているが、これは「谷」において、理助が「鬱金の切れを首に巻」き、「次の春理助は北海道の

牧場へ行ってしまひました」とされていることにも通じており、本作における「漢子」と同一人物とは言えないにせよ、イメージの上では一続きの人物であるということになりそうだ。

「五十篇」の「[そのときに酒代つくと]」は、「柳沢」と題されたこともあるように、岩鷲ホテルの夫婦がモデルとなっているようで、自分の畑に馬を放って荒らしては、酒代のために賠償金をせびる男についての詩である。だが、その妻は妻で、夫が家を空けると、闇の中を男と密会するために奔走している。しかし賢治はこの妻を批判するのではなく、貴人の相だとされる重瞳を持つ人物として描き、咎めようとはしていない（『五十篇評釈』）。

本作でも、子どもに嘘を教えて、自分は新しい葦を取り尽くすという小悪党としか言いようのない男を描いているが、腐った魚を食べて悶え死ぬ妻、自分の畑を馬に荒れさせて賠償金をせびる男と重なっており、不貞の妻をヒロイン視したように、小悪党の男についても、どこかヒーロー視しながら描いていうように感じられ、「[そのときに酒代つくと]」と似通ったものを感じることができる。

拙論「五十篇」と「一百篇」賢治は「二百篇」を七日で書いたか（『『一百篇評釈』）で、賢治は「五十篇」と「一百篇」に、内容的な、あるいは語彙的に似通った部分を持つ詩を並列的に書いており、それを「対」と仮称して論じたが、もしかしたら賢治は本作と「そのときに酒代つくと」とを、「対」になる詩として推敲し、「『一百篇』の方に登場させるつもりがあったのかもしれない。

さらに、もう一点、気になるのは、下書稿<sup>(2)</sup>までは残されなかったものの、この塩魚の頭について語る際に「かしこにぞまがつみはあれ」と書いていたことである。これも「五十篇」と「一百篇」賢治は「『一百篇』を七日で書いたか」（前掲）に書いたことだが、賢治は「まがつみ（び）」という日常的にはまず使うことのない語を四度も、「『一百篇』の定稿にのみ登場させている。本作を「『一百篇』に収める意図があったからかも知れない。

以上、本作と「五十篇」所収の「『そのときに酒代つくと』」の関係は深いように感じられるが、本作は未定稿に留め置かれ「対」は実現できていない。両詩の舞台やアイテム、テーマなどに共通するところは窺えるに

しても、「対」の作品に仕立てるには、もっと本格的な手入れをする必要があったと感じたのかもしれない。

赤田秀子（「文語詩を読む その6 童話の素材を文語詩に 未定稿「エレキに魚とるのみか」を読む」（「ワルトワラ17」ワルトワラの会 平成十四年十一月））は、藤原慶次郎が登場する童話「鳥をとるやなぎ」を文語詩化した「「エレキに魚をとるのみか」が未定稿に留まったことについて、「文語詩で、病床における幻覚や幻想を扱ったものは別とすれば、以前言及したが、文語詩草稿で、ファンタジーを手法として展開しようとしたモチーフは、途中で放棄され、あるいは主題を変換させているものが目立つ」と書き、文学の現在時点ともいうべき「いま」を迫るには、文語という手法に限界があったのではないかとしていたが、そういった側面もあったのかも知れない。

### 先行研究

神昌子「季節の譜」（『宮沢賢治「春と修羅 第二集」の風景』無明舎出版 平成十六年二月）

三宅岳「宮沢賢治「谷」小論 現出する異界との接触」

（『東北文学の世界12』盛岡大学文学部日本文学科 平成十六年三月）



岡沢敏男「作品現場からの検証 「柳沢」の宿での体験

〈旭川の兵隊上り〉の男」「ワルトラワラ22」「ワルトラ

ワラの会 平成十七年八月)

古沢芳樹「賢治作品を深読みする」 「賢治研究121」 宮沢賢

治研究会 平成二十五年八月)

## 78 「霜枯れのトマトの気根」

霜枯れのトマトの気根

その熟れぬ青き実をとり

手に裂かばさびしきにはひ

ほのぼのとそらにのぼりて

翔け行くは二価アルコホール

落ちくるは黒雲のひら

### 大意

霜で枯れたトマトの気根が生える中で

その熟れないままの青い実を取って

手で裂いてみるとさびしいにおいが

ほのぼのと空に向かって立ち昇り

二価のアルコールのように翔けて行く

落ちて来るのは黒雲の欠片だ

### モチーフ

盛岡高等農林学校時代に詠まれた短歌から生れた文語詩。ただ、推敲に際しては稗貫農学校時代の経験も織り込まれているようにも感じられる。「二価アルコール」を鳥のイメージだとする解釈もあるが、ここでは新しい文明の方向性をイメージさせるもの、と捉えておきたい。

### 語注

**霜枯れ** 草木などが霜のために枯れること。冬の季語。

**気根** 植物の地上に出ている茎などから根が生えたもの

のこと。種類によつて機能や構造もさまざまだが、ト

マトの場合は水分や肥料の不足から、また病気によつ

て生ずることがある。原子朗（後掲）は「気根は機根

に通じる。ここではさとりえない「じやじょうしゅう邪定聚」の機根

（仏教のいう機根には得信の「しやうじょう正定聚」のそれと、

どちらともつかぬ「ふじょう不定聚」のそれとの三者がある）

を、賢治はおそらく意識している」とするが、特にそ

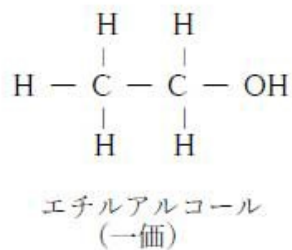
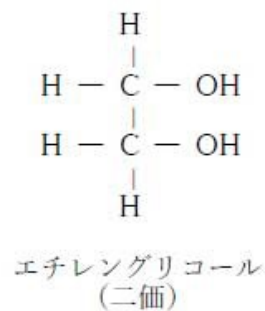
のようにとらえる必要はないように思う。

**二価アルコール** 炭化水素の水素原子を水酸基（O

H）に置換した化合物の総称をアルコールというが、

一般にはエチルアルコールを指し、酒を意味する場合が多い。二価アルコールとは水酸基の数が二個のものと、エチレングリコール ( $C_2H_4O_2$ )、プロピレングリコール ( $C_3H_8O_2$ ) などを指す。下書稿(一)では「二価アルコール」であったのが下書稿(二)では「二価アルコール」となっているが、当時の文献を国会図書館で参照するかぎり、化学系はアルコール、医学系でアルコールを使う傾向があったようだ。ただ、賢治としては敢えて八音の「二価アルコール」として字余りにすることで、音調に変化をつけようとしたように思われる。『定本語彙辞典』には本作をあげて「「ほのぼのとそらにのぼりて／翔け行くは二価アルコール」とある。アルコールの軽さもだが、鳥の群れ飛ぶ姿を二価アルコールの代表的な一種、エチレングリコール構造式にたとえている」とするが、二価アルコールの代表としてあげているエチレングリコールは「透明な無色のシロップ状の液体で、甘味を有するが無臭である。揮発性は低い」(「国際化学物質完結評価文書 エチレングリコール・環境への影響 世界保健機関 国際化学物質安全性計画」国立医薬品食品衛生研究所安全情報部 平成十七年) とのことなので、「軽さ」という点で問題がありそうだ。また、二価ア

ルコールをエチレングリコールに特定させてしまつてよいかという点



も問題がないわけではない。エチレングリコールは、たしかに最も構造の単純な二価アルコールかもしれないが、それでは一価アルコールを最も単純なメチルアルコール ( $CH_3OH$ ) に代表させ、エチルアルコール ( $C_2H_5OH$ ) を除外してしまつていいのか、ということにもなりかねない(賢治作品には、メチルもエチルも登場している)。さらに構造式を鳥にたとえるのは興味深くはあるものの、当時の日本語によって書かれた化学の教科書等を国会図書館デジタルコレクションで参照した限り、右上に示したような『定本語彙辞典』に掲げられた構造式を用いている例は見当たらなかった。また、その下に示した一価のエチルアルコールの構造式に比べて、二価のエチレングリコールだけが特に鳥の飛ぶ姿に似ているのだとも言えないことから、あまり説得力はないよ

うに思う。では「二価アルコホール」が何を示していたのかというと、残念ながら十分に根拠をもって示せるような答は見つけ出せていない。ただ、当時の有機化合物に関する研究について調べてみると、十九世紀後半になってさかんになっており、天然の有機化合物に留まらず、天然ではない新しい有機化合物の合成や、天然物とは異なる性質や用途も研究されていたことがわかる。例えば高本隆二の「エチレングリコールの用途並に性質」（「化学工業」86）「化学工業社 大正十三年六月」というエチレングリコールに関する論文では「食品学医薬学界に有する広汎なる用途に就て研究の結果は、生理学的作用並に殺菌作用は共に酒精と同一なることを確め得たのである、又本品が動物経済学上全く無害なることを証明せらるゝに至つた即ち、相当量を数週間に亘つて連用せしに供試動物は表面的に何等の証左も呈することなく又屍体の解剖を行ふも是れ等動物は異常の反応又は変化をも認むべきものがない」とされ、「エチレン、グリコールは高級溶媒、防腐剤なるが故に、濃厚なる果実の清涼飲料調味薬の製造に、又糖果、缶詰品、ケチヨツプ、ミンスマー、ト、サラダドユレツシングその他の食料品製造上に賞用せられ」、防腐剤や化粧品にも応用できそうだと書

かれている。今日ではPET樹脂（ポリエチレンテレフタレート）の主原料として、また自動車用の不凍液として用いられており、毒性を持つことが明らかになったため食品には用いられなくなったが、当時の有機化学への期待感の大きさが文面から窺える。このような一九二〇年代前後の「二価アルコホール」だが、天然物であるトマトの青い実からほのぼのと立ち昇るといふことは現実的には起こりえない。あるいは農薬や肥料として使用されていたのかもしれないが、霜枯れた青いままのトマトを裂いて二価アルコールが立ち昇ったということは考えにくい。となれば、ここでは具体的化学物質としてではなく、イメージや語感、音調から用いられたということになるかと思う。では、そのイメージがどのようなものであったかと言えば、当時の化学者たちにとっては期待のできる、注目の高い分野であったため、未来に対する明るい展望とといったものが託されていたように思われる。ただ「さびしきにほひ」と並置されていることについては疑問も残り、さらなる討究が必要かと思われる。

## 評釈

黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(右肩に赤インクで㊦)、その裏面に書かれた下書稿(二)の二種が現存。「歌稿〔B〕」の「大正五年十月より」の項に書かれた401から404が先行作品。当該の短歌四首は赤インクの線で囲まれ、右肩に転とある。『新校本全集』によれば「文語詩への発展・改作がなされたことを示している」という。

下書稿(一)から見ていきたい。

ひとびとのいきどほろしく  
はだしにてはたけに來れば  
霜枯れしトマトの氣根  
しみじみとうち並びたり

401 霜枯れし／トマトの氣根／しみじみと／うちなら  
びつゝ／冬きたるらし。

402 青腐れし／トマトたわわのかれ枝と／ひでりあめ  
とのなかなるいのり。

403 青腐れ／青きトマトの実を裂けば／さびしきには  
ひ／空に行きたり。

404 はだしにて／雲落ちきたる十月の／トマトばたけ  
に立ちてありけり。

うち酸えし青きトマトの  
実をとりて二つに裂けば  
あゝなんぞさびしきにほひ  
ほのぼのとそらにのぼれる

今日はこの畑に人なく  
崖の上の農舎もひそみ  
まるめろの葉もゆらがねば  
水禽のむれももだせり

トマトが霜枯れする頃で、次の項が「大正六年一月／一九一七年」ということから考えると、制作は大正五年の秋ということになる。賢治は盛岡高等農林の二年生で、九月には秩父・長瀬・三峰に土性・地質調査に赴き、十月には山形に奥羽連合共進会の見学に向いている。

落ちくるは黒雲のひら  
さだめなくうかび立てるは  
ほのじろき二価アルコール  
十月のそらのさびしさ

盛岡高等農林時代の短歌に発する詩篇のようだが、

「東京」ノート」にも「文語詩篇」ノート」にも大正五年の秋には特にメモもない。文語詩には「崖の上の農舎」とあるが、盛岡高農のキャンパスは平地にあり、崖と呼べるような場所はない。実習地や実習先での経験なのかもしれないが、崖の下に畑があるとすれば稗貫農学校、そして羅須地人協会時代が相当する。ただ自宅を

「農舎」と呼ぶのは不自然だし、「今日はこの畑に人なく」とあるのも独居自炊時代だとすれば不自然だ。となると、伝記的に考えれば稗貫農学校時代を思い返してのものようである。ただ、実体験を基にしながらもいくつかの経験を詠み込んでいたり、虚構化していた可能性も考えるべきだろう。

さて、農学校時代に、「ひとびとのいきどほろし」を書いたとなれば、「未定稿」に「卑屈の友らをいきどほろしく」があつたことが思いだされる。

卑屈の友らをいきどほろしく

粘土地二片をはしりてよぎり

崖にて青草黄金なるを知り

のぼりてかれ草黄なるをふめば

白雪きららに落ち来るものか

一列赤赤ならべるひのき

ふたゝび卑屈の友らをおもひ

たかぶるおもひは雲にもまじへ

かの粘土地なるかの官庁に

灰鑄鉄のいかりを投げよ

稗貫農学校に隣接して稗貫郡役所があり、賢治はその官庁に勤める旧友の態度に怒り、崖を降りてきた、というこのようだ。季節は春先で、畑も登場しないし、トマトも出てこない。しかし、怒りを相手に向けるのではなく、自分で噛みしめながらトマトを裂いたり、歩き回ったりするところに共通性がある。とすれば『春と修羅(第一集)』の表題作ともなった「春と修羅」にも近いということになるが、この点について吉田文憲(後掲A、B、C。引用はBから)も、次のように論じている。

実際、「霜枯れのトマトの気根」と「春と修羅」の詩の構造は、驚くほどよく似ている。「翔け行くは二匁アルコホール」に「このからだそらのみぢんにちらばれ」が対応しているとすれば、「落ちくるは黒雲のひら」にはこの詩の最後の一行「雲の火ばなは降りそそぐ」が対応している。いずれも、自らの身体を鳥のか

たちに変換させ（「春と修羅」第一連の末尾には、「鳥はまた青ぞらを載る」という一行がある）、さらにそれを宇宙の微塵に還し、その散体した身体Ⅱ分子が激しく渦巻く黒雲となつて、そこからやがて雷鳴をともなつた豪雨を降らせる……。そういう修羅から黒雲へのすさまじい物質変換の死と再生のプロセスの中に、これらの詩はおかれている。

そのとおりであるように感じられるが、ただ吉田は「二価アルコホール」を鳥とみなす説から出発して論じている点は気になる。語注に書いたように、興味深い説ではあるが根拠に乏しく、ここでわざわざ鳥に見立てなくとも天と地に分れて散つていく様子は十分に描かれていると思われるからだ。

「二価アルコホール」を鳥のたとえでなかつたとすれば、では、いったい何だったのだろう。「二価アルコール」は下書稿(一)に登場してから、ずっと残っていることを思えば、賢治にとつてはよほど大事な言葉だったということになりそうだが、あまりスッキリした答を見つけないことができていない。

ただ、語注にもあげたように、当時の書籍や論文を探してみると二価アルコールのエチレングリコール、トリ

メチレングリコール、ブチレングリコールなどの効用について発表する論文が相次いでいたことが確認でき、食品や繊維、機械などの幅広い分野での影響がはじめていたようだ。現在は毒性が問題になつて食品には使えないようになつたものもあるが、当時は夢の薬品のように思われていたようである。賢治がこうした成果を、どこまで知っていたかはわからないが、「二価アルコール」という言葉を知っていたという時点で、プラスイメージであつたことは想定してよいように思う。

また、賢治が酒（アルコール）を嫌っていたことは、童話「ポラーノの広場」に「酒を呑まないことで酒を呑むものより一割余計の力を得る」と書き（後に破棄）、また、羅須地人協会時代に賢治と行動を共にしていた千葉恭に向かつて「君がほんとうに農民指導者になろうとするならば、次の三つのことを自分に約束出来るか。その一つは酒を飲まないこと、その二つは煙草を喫わないこと、その三つはカカアをもらわないこと」（千葉恭

「羅須地人協会時代の賢治(二)」「イーハトーヴォ(第二期)」宮沢賢治の会 昭和三十年五月）と語つたエピソードなどが残っていることに明らかだろう。そんな賢治が、単なるアルコールではなく、二価のアルコール、すなわち二倍の価値のあるアルコールとして、何がしかプ

ラスのイメージを抱いた可能性を考えてもよいのかもしれない。

ともあれ「二価アルコール」には、未来の、明るい、理想的な、といったイメージが託されていたように考えられるのだが、賢治は青いトマトを引き裂いた時の青臭いにおいを「さびしき」と書いており、それを重視すると、賢治が明るい未来を想定していたとするのは不似合いであるようにも思えてくる。こう考えてくると、本作を読むためには、さらに別の手掛かりが必要であるように思えるが、今のところアイディアは見つかっていない。

### 先行研究

原子朗「何よりも作品を」『国文学 解釈と鑑賞 61-11』

至文堂 平成八年十一月)

吉田文憲 A 「宮沢賢治の文語詩」『霜枯れのトマトの気根』をめぐって」『文芸論叢 35』 文教女子短期大学

部文芸科 平成十一年三月)

吉田文憲 B 「賢治への新たな接近 (11) 「明滅」と化学式」『現代詩手帖 43-4』 思潮社 平成十二年四月)

吉田文憲 C 「文語詩を掘り起こす 宮沢賢治、テキストという名の地質学」『国文学 解釈と教材の研究 47-7』 学燈社 平成十四年六月)

小林俊子「詩歌」『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』 勉誠出版 平成二十三年八月)

### 79 「雪」とひのきの坂上に」

雪とひのきの坂上に  
粗き板もてゴシツクを  
辛く畳みて写真師の  
聖のねぐらを営みぬ

ぼたと名づくる雪ふりて  
いましめさけぶ櫓のこら  
よきデュイエットうちふるひ  
ひかりて暮るゝガラス屋根

### 大意

雪とヒノキの坂の上に  
粗末な板でゴシツク建築風を  
なんとか装った写真師が  
聖なるネグラを営んでいる

ボタと名付けられる雪が降り  
囃し立てるそり遊びの子どもらの声の中を  
上手なデュエットがうちふるえ  
屋根に付けられたガラス窓は光って夕暮れ時を迎える

### モチーフ

花巻で新聞店を営んだキリスト教信者の齋藤宗次郎をモデルにした作品のようだ。賢治は異なる信仰の持主ではあったが齋藤を敬っていたことが知られている。最終的には削除されているものの「たはれめ」の文字もあり、「せいなる、ねぐらを営む」という句もあることから、「ねぐらでの性の営み」を連想しないわけにはいかない。また、手入れ段階には「信と恋とを育みぬ」とする段階もあったように、本作では聖と性の両方を描こうとしていたように思われる。

### 語注

**ゴシック** 元は「ゴート人風の」という意味の蔑称だったが、次第に建築や美術、思想、ファッションなどに幅広く広がった中世風の様式。『日本国語大辞典』では「ロマネスクに続くヨーロッパ中世美術の様式。聖堂建築がもつとも典型的で、交差肋骨で支えられた穹

窿（きゆうりゆう＝ボールト）や、高く空に向かつてのびる尖塔（アーチ）など、垂直線から生じる上昇効果の強調が特色。ゴシック式。ゴシック風。ゴシック」とまとめられている。教会風の建物を装ったのだろうが、下書稿(一)の手入れ段階では「この教会は写真屋を兼ねたるのみか」ともあった。

**ぼた** 「ぼたと名づくる雪ふりて」は、仲間うちでの言葉、あるいは方言などであったことを示しているのだろう。牡丹の花びらのように大きな雪となって降る牡丹雪のことを指すのだろうが、『日本国語大辞典』では「ボタイキ〔飛驒〕ボタユキ〔豊後〕ボダユキ〔山形〕ボダユギ〔津軽語彙〕ボタンイキ〔鳥取〕」をあげている。

**いましめさげ** 「戒め」について、『日本国語大辞典』には「(1)あやまちないように、前もってする注意。訓戒。警告」「(2)行動を禁止したり抑制したりすること。(1)してはいけないと止めること。禁止。制止。禁制。(2)よくない行為を二度としないようににしかること。懲らしめ。懲戒」とあるが、写真師がたはれめを引き入れ、デュエットなどを歌っていることについて「昼間から何やってるんだ!」「イチヤイチャするんじゃないぞ!」といった声であったと



考えたい。下書稿(一)の三度目の手入れ段階(鉛筆)で、賢治は行商や牧人に舌打ちさせるアイディアを採用するが、同じ時に櫓で遊ぶ子どもたちにも喚声を上げさせるアイディアが生まれている。佐藤栄二(後掲)は「戒め叫ぶ」とは、坂上の写真館の前で、先に滑り下りてまた上がって来る仲間に、櫓が行くから「あぶないぞお!」「気いつけるよお!」と叫ぶのである。下からは見通しが利かない坂か」とし、島田隆輔(後掲)も、「坂の見通しが利くか利かぬかにかかわらず叫んでいるありさまであろう」として、子どもたちの明るく元気な喚声を言うのだろうとしている。賢治は童話「ひのきとひなげし」で「何を云つての。ばかひのき、けし坊主なんかなくてあたしら生きてゐたくないわ。(略)わあい、わあい、おせっかいの、おせっかいの、せい高ひのき」と書いたり、あるいは「風の又三郎」では「うあい、うあいだが、又三郎、うなみだいな風など世界中になくてもいゝなあ、うわあい」と書いているが、そんな感じであったのではないだろうか。行商や牧人を削除した後にも喚声を上げる子どもたちだけを残していることから考えて、賢治は写真師とたはれめを糾弾したり冷やかした

りする役割を子どもたちに負わせたのではないかと考えたい。

デュイエット 二重唱のこと。佐藤(後掲)や島田(後掲)が指摘するように讚美歌を写真師とたはれめとが歌っている声だろう。

#### 評釈

黄野(240行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(右肩に藍インクで㊾)、黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(二)(手入れの段階で、一時的に「篤信の写真師」のタイトル)の二種が現存。

下書稿は二種のみだが、複雑な改稿過程をたどり、少しずつニュアンスが異なっている。順を追って見ていくことにしたい。まずは下書稿(一)の初期形態を示す。わずか五行からなるものだ。

風いと寒く粉雪して

児ら櫓引けるひるすぎを

たけいとひくきはれめの

頬べに赤くよそほひて

その写真屋に入り行きにけり

最終形態にある「ゴシック」や「聖のねぐら」といった語がないことから、この段階で宗教性は感じられない。「たはれめ」とは娼妓や酌婦のことだろうが、文語詩に多出し、賢治は一貫して彼女たちに同情的である。ただ、この五行のみを読めば、頬べにを赤く装った「たはれめ」が、営業活動の一つとして写真屋に入っていた（あるいは写真撮影のためかもしれない）としか読み取ることはできない。

ついで下書稿(一)の手入れ（藍インク段階）を見ていくことにしたい。

雪とひのきの坂上に  
粗き板もてゴシックの  
塔のさまなどしつらへし  
いとさゝやけき写真店あり

膠母のさまに粉雪して  
兎ら櫛引けるひるすぎを  
たけやゝひくきたはれめの  
頬べに赤くよそほひて  
祈りの書をたづさえて  
つゝましやかに入り行ける

写真店なのに「ゴシックの／塔のさまなどしつらへ」であり、たはれめは「祈りの書をたづさえて」「入り行ける」と具体化されているので、どうも写真師がたはれめを連れ込んだというのではなく、宗教的なつながりがあったことが示唆されている。もっとも、初期段階から賢治にその意図があったのかどうかは分からない。

下書稿(一)の鉛筆による手入れを見ていきたい。

粗き板もてゴシックを  
塔のさまなどしつらへし  
わづかに畳む写真店

酔母のさまに粉雪して  
こらそりわたす暮ちかく  
頬べに赤くよそほひて  
たけいとひくきたはれめの  
祈りの書をたづさえて  
つゝましやかに入り行ける

さらにひとたび粉雪して  
よきデュイエットふるふとき

毛布荷へる行商の  
二人ぞ坂を下り来り  
この教会は写真屋を  
兼ねたるのみかこのまひる  
なんぞなめげに喚ぶやと  
舌打ちしつゝ去りにけり

新たに加えられた第三連では写真屋が、熱心なキリスト教徒だというだけでなく、店自身が教会を兼ねていたことを明らかにするが、通りすがりの行商、つまり、この町の定住者ではない存在が、不謹慎さに舌打をするという設定となっている。いかに祈りの書（おそらは聖書）を持って「つゝましやかに」建物の中に入っていたにしても、「頬べに赤くよそほひて」いることから、誰の目にも「たはれめ」であることは明らかだったのだろう。

この三連は、同じ筆記具で次のように手入れされる。  
さらにひとたび粉雪して  
いましめ叫ぶ櫓のこら  
よきデュイエットうちふるひ  
ひかりて暮るゝガラス屋根

牛乳の車をひきなづみ  
坂のぼり来し牧人の  
やゝにとゞまり舌打ちて  
なんぞまひるをはゞからぬ

行商を牧人に書き換えているが、どちらも町や村の中心にいたるとは言いにくい存在である。そうした権力者ではない人々からも非難される対象としてキリスト教徒、そして「たはれめ」があつた、ということなのだろう。そして、この時から、櫓遊びをしていた子どもたちにも「いましめ叫」ばせるようになっていく。

ただ、賢治がキリスト教信者に対して偏見を持つていたり、批判的な態度をとっていたかという点、そういうことはなかったように思う。法華経の熱心な信者であった賢治ではあるが、中学時代にはプロテスタントやカトリックの教会にも顔を出しており、文語詩にもタツピング牧師やプジェー神父が登場していることから、単純な批判をするようなところはなかったと考えるとよいだろう（ただ、文語詩に何度か登場する隠し念仏に対しては、あからさまな批判意識を窺うことができる）。

また島田隆輔（後掲）が書くように、本作には実在の人物である斎藤宗次郎のイメージが強く出ているように

思われる。斎藤は文語詩「暁眠」（一百篇）のモデルとも言われる人物で、その先行作品とされる「〔冬のスケッチ〕」の第一九葉では、「みちにはかたきしもしきて／きたかぜ檜原をならしたり／贖物師、加藤宗二郎の門口に／まことの祈りのこゑきこゆ」とあった。

斎藤は稗貫郡里川口尋常小学校の訓導であったが、内村鑑三の影響を受け、キリスト教教育を行ったことが問題となつて転任を余儀なくされ、明治三十五年には二年間の休職を命じられた。明治三十六年には、日露戦争での非戦を貫くために兵役や納税義務の拒否を決意し、その実行を内村鑑三に打ち明けるが、内村は花巻に駆け付けて「真理と真理の応用を混同すべからず」と説得するということがあった。

翌年には休職期間の満了と共に依願退職。明治三十八年には書籍雑誌商店求康堂を開き、書籍、雑誌、学用品などを扱い、後には新聞の取次もすることになっていく。花巻では、石を投げられるような存在であったが、まじめな仕事ぶりや人格が認められ、いつしか花巻でも敬意を持たれる存在になったとされている。

島田も書いているように、斎藤は写真館を営んでいたわけではないが、花巻で坂と聖なる家といえ、錦小路

を上がった東側にあつた求康堂と、その店主であつた斎藤を思い浮かべるのは当然だろう。

島田はまた斎藤の『二荆自叙伝 上』（岩波書店 平成十七年三月）の大正十年一月二日の記録を紹介するが、そこには「主の御名を称め称えて褥を起ち身を潔めて後讚美歌二百十七番、わが靈魂を愛するイエスよ……」を歌つた。尚二、三の歌を歌うた。妻も共に歌うた。娘は未だ床の中に在つて小声に歌うた」とあるが、斎藤がこうした生活を送っていたことを、賢治も知っていたのだろうか。

また、賢治が「たはれめ」に偏見を抱いていたということも考えにくい。というのも、これも島田が『宮沢賢治研究 文語詩稿・叙説』（朝文社 平成十七年十二月）の冒頭に「〈歌ひめ〉の詩系譜を読む」を掲げていることにも明らかのように、文語詩では歌ひめ（たはれめ）の境遇に共感し、励ますような作品を多く書いているからだ。

本作に関して、特に島田が注目するのは明治三十九年に、斎藤宗次郎の養母・スミの姉で花巻川口町で貸座敷業をしていた池田政代が自分の仕事に対する罪の意識について斎藤に相談を求めた際、政代に真摯に接したということである。斎藤は、その後、足しげく政代を訪ね、

内村が刊行していた雑誌「聖書乃研究」を朗読したというが、明治四十四年になると政代は貸座敷業を廃止して娼妓を解放し、以降は旅館経営者になったという。

もちろん池田政代が「たはれめ」にあたるわけではない。ただ、「貸座敷業を廃棄し、娼妓を解放」したという事態が寄り添っているところに、斎藤宗次郎から信と愛とを与えられた池田政代の傍らに、娼妓たちのすがたもまた重なって見えてくるといえるのではないか。また、詩稿では、「たはれめ」が「篤信の写真師」を訪れ、それも「祈りの書」を携えているという設定から一度や二度の訪れでない状況をうかがわせる。

紙面を改めての下書稿(二)を見てみよう。

雪とひのきの坂上に  
粗き板もてゴシックを  
わづかに畳む写真店

酔母のさまに粉雪して  
こらそりわたす暮ちかく  
頬べに赤くよそほひて

たけいとひくきたはれめの  
祈りの書をたづさえて  
つゝましやかに入り行ける

さらにひとたび粉雪して  
いましめさけぶ櫛のこら  
よきデュイエットうちふるひ  
ひかりて暮るゝガラス屋根

下書稿(一)の手入れで示された「教会」という文字は消え、「ゴシック」という文字から、教会的な雰囲気を変化させるだけになっているところがまず、大きな変化である。そして行商人も牧人も姿を見せなくなっている。しかし、これについては語注にも書いたように、新しく登場した子どもたちに「いましめさけ」ばせることによつて、直接的にはないが、写真師とたはれめを中傷する雰囲気を出しているように感じられる。子どもが大人社会の深い事情を知るわけがない、と言われるかもしれないが、子どもこそ、大人の噂話を聞いては、さしたる考えもなく吹聴するところがあるものだ。

また、これまでは行商人と牧人という、この地方都市の中心的な存在ではない人間が彼らを批判していたが、

やはり子どもという、町にとっては周縁的な存在に批判させており、賢治の意図は明瞭であるように思われる。なお下書稿(二)の手入れは次のとおり。その推移も興味深いので、『新校本全集』の表記を簡略化しながら引用してみることにしたい。

① ↓ 『エスのしもべの』 写真師 『神（「を」を消して）に ↓ 削』 は ↓ 削』

雪とひのきの坂上に  
粗き板もてゴシツクを

辛く畳みて写真師 「は ↓ の」

「『聖なる ↓ 削』 信 ② ↓ と ↓ 削』 『業 ↓ 削』 と恋と

を 『営 ↓ 育』 みぬ ↓ 聖 『なる ↓ 削』 のねぐらを営み

ぬ（縦線一本で削除して） ↓ 聖なる家を営みぬ ↓

（縦線 二本で）削』

わづかに畳 『む写真店 ↓ み写真師は』 ③ ↓ エスのみ

名もて（書きかける） ↓ 削 ↓』 ↓ 削』

4 × 9 行 × 印にて削除

「さらにひとたび粉雪して ↓ 酵母のさまに粉雪して ↓ ぼた」と名づくる雪ふりて」

いましめさけぶ櫓のこら  
よきデュイエツトうちふるひ  
ひかりて暮るゝガラス屋根

まず、最初に気付くのは、ここまで常連だった「たはれめ」という登場人物を消してしまつて、「よきデュイエツトうちふるひ」だけから艶めかしい女性の存在を感じ取らせようとしていることだ。賢治がたはれめを登場させなくなつた、というわけではないだろうが、佐藤（後掲）が「どうしても、割烹か旅館に出入りして客の接待をする酌婦のようなイメージが拭えない。／＼作者はせめてドラマの上だけでも、この「たけいとひくきたはれめ」を職業の如何にかかわらず、真ごころをもつた信者として扱うことができないかに腐心したのではあるまいか」というのは理解できないでもない。

また下書稿(二)の段階で「教会」の文字を消してしまつたために、写真師が市井の人になつてしまつているように読めるため、賢治は「エスのしもべ」あるいは「エスのみ名」といった言葉や「聖なる家」といった場所を設定し、キリスト教色を打ち出そうとしていることである。

賢治は、この信心深い写真師と女性の関わりについて、信と業と恋の三つで説明しようとし、最終的には「聖のねぐらを営みぬ」に落ち着いている（引用した校異では追いついていないが、『新校本全集』では「辛く畳みて写真師の」の次に、「聖のねぐらを営みぬ」を生かして入れるのが作者の意向とみて、その形を本文に掲出した」としている）。

ここに「恋」とあり、佐藤（後掲）はこれを「信仰と恋愛の両立という「宗教風の恋」（『春と修羅』第一集）以来のテーマが、晩年の作者の脳裏をよぎったことをうかがわせる」としているが、島田は「エロスでなく、アガペーのほうに向かおうとするもの。「写真師」と「たはれめ」との、純真なる信仰と愛とがこの写真店／教会で営まれ育まれているということだった」とし、「「信」も「恋」もその内に蔵して「聖」という一点に集約され、それを「営」むものに焦点をあてるのである」とする。ただ、モデルとなった斎藤宗次郎のイメージに引きずられてしまっているのではないかとも思われる。

というのも「聖のねぐらを営みぬ」という詩句だが、「ねぐら」とは寢座であり、本来は寝る場所、つまり寢床であり、そんな寢床での営み、たとえば、当然のことながら愛の営み、性行為が連想されよう。それを「聖」

だというのが、「聖」の読みは「せい」であって「性」に通じる。佐藤（後掲）は信仰と恋愛の相克だとするのだが、おそらくそういうわけでもなく、ここでは信仰と恋愛が共存してしまっている場を描こうとしていたのではないかと思うのである。

佐藤は「熱心なキリスト教徒である写真館の主と「聖のねぐら」を伴にする道を選んだ「たはれめ」が、世間の思惑を物ともせず、聖書の教えに従って自己の使命感に忠実に生きる姿をもう一つのドラマに仕立て上げようと試みていた点においても、特異な作品として評価したい」とするのだが、写真師と「たはれめ」とは、「聖のねぐら」を供にするだけではなく、おそらくは「性のねぐら」をも供にするかのように描かれているからこそ特異であると思うのである。と言っても、具体的に性行為を行っていたかどうかはわからないし、示されてもいないが、読者の頭にどこか淫靡な「性」のイメージを漂わせれば十分だったのだろう。

佐藤は賢治が「五十篇」の「そのときに酒代つくる」と「」で、既に密通する女性を描いており、「理不尽でこせこせした夫に忍従を強いられるのを潔しとせず、結婚という社会規範にあえて反旗を翻した女性を描いた文語詩」であるということを引き合いに出そうとするのだ

が、本作では、信心深い写真師とたはれめが、信仰と恋愛の二つの意味で方向性を同じくし、行商や牧人、子どもたちにまで非難されながらも、それを貫こうとしていることを描こうとしたのだと解したい。

斎藤宗次郎への冒瀆ではないか、と言われるかもしれないが、キリスト教信者がたはれめと愛し合っているとはいけないというのではないはずだし、どちらかが不倫や姦通をしていたというようなことでもテクストから読み取れない限り、誰からの批判の受けようもないはずだ。むしろ、この関係を不謹慎だとする者こそが不謹慎であり、謂れない職業差別、信仰の自由や恋愛の自由を奪うものだということになるのではなからうか。ただ、賢治自身、こうした存在は、行商人や牧人、子どもたちからも非難されることは十分に予想できていたわけであり、その刺激の強さゆえに未定稿という位置に留め置かれた、といったことがあったのかもしれない。

### 先行研究

佐藤栄二「『雪とひのきの坂上に』」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』柏プラーノ 平成十二年九月)

島田隆輔「『雪とひのきの坂上に』」(『宮沢賢治研究』文語詩稿) 未定稿 信仰詩篇の生成』ハーベスト社 平成二十七年六月)

### 80 「鉛のいろの冬海の」

鉛のいろの冬海の

荒き渚のあけがたを

家長は白きもんばして

こらをはげまし急ぎくる

ひとりうなる黄の中を

うちかつげるが足いたみ

やゝにおくるゝそのさまを

をとめは立ちて迎へゐる

南はるかに亘りつゝ

氷霧にけぶる丘丘は

こぞはひでりのうちつゞき

たえて稔りのなかりしを



日はなほ東海ばらや  
黒棚雲の下にして  
褐砂に凍てし船の列  
いまだに夜をゆめむらし

鉛のいろの冬海の  
なぎさに子らをはげまして  
いそげる父の何やらん  
面にはてなきうれひあり

あゝかのうれひけふにして  
晴れなんものにもせは  
ことなきつねのまどひして  
こよひぞたのしからましを

### 大意

鉛色をした冬の海の  
荒波のおしよせる明け方の渚で  
家長は白い紋羽を着て  
子どもたちを励ましながら急いで歩いている

ひとりの黄色い頭巾をかぶった女の子が



岩手県九戸郡野田村の下安家から三崎半島を臨む

足をいためているのか  
少し遅れているその様子を  
少女は立ったまま迎えている

はるか南まで遠く覆っている  
氷霧に包まれた丘丘は  
今年の日照り続きのために  
稔りがなかったのであった

朝日はまだ東の海の  
黒い棚雲の下に出ており  
漁船は褐色の砂に凍てついてしまっており  
未だに夜の夢をみているようである

鉛色をした冬の海の  
渚で子どもたちを励ましながら  
急いでいる父はどうしたのだろうか  
顔には果てしのない憂いの翳がある

ああこの憂いが今日のうちに  
晴れてくれるということがあるのならば  
いつもと何の変りもなく一家で円居しながら

今夜を楽しく過ごすこともできたのだろうかけれど

### モチーフ

「文語詩篇」ノート」にも記されている三陸海岸の旅での見聞をまとめたものだろう。不作の翌年、姉妹を連れられた父親が暗い顔をして歩いているとなれば、娘を身売りさせようとしているのかとも思われる。母親の姿がないのは、既に身売り等でここを離れていたからなのかもしれない。

### 語注

**もんぱ** 『日本国語大辞典』には「綿布の一種。綿フランネルに似て、地質が厚く粗く、柔らかく、毛ば立たせて織ったもの。多く肌着や足袋裏や帯芯（おびしん）に用いられた」とあり、また、岩手県気仙郡の方言として「男の防寒用の帽子」ともあった。

### 評釈

黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（右肩に藍インクで㊦）が一種現存。「文語詩篇」ノート」の「1925」の「一月」に次のようなメモが赤インクでなされている（ただし原文は横書き）。

### 安家 外

寒キ宿ノ娘、 豚ト、帳薄ニテ  
ノ面灯落チナントス 濁ミ声ニテ罵レル  
ナガ行末思ヘバ心ハ暗シ

暁早ク家族ヲ整ヘテ海辺ヲ急ギ来シ白キモンパノ家族  
モロモロノ ノ中ニ於テ「大姉↓姉妹」ノ  
大戸 思ヲナセト

『新校本全集』には「メモは本詩篇の素材と思われるが、他の場合に見る文語詩に作成済みとみられる×印はついていない」とある。

大正十四（一九二五）年一月五日、花巻農学校教員だった賢治は三陸海岸への旅に出る。開業したばかりの八戸線の種市駅で降りると（特別な用事もないのにこの旅に出た理由は、新線に乗りたかったためだろう。詳しくは拙論「鉄道ファン・宮沢賢治 大正期・岩手県の鉄道開業日と賢治の動向」（「賢治研究96」宮沢賢治研究会 平成十七年七月）を参照されたい）、徒歩や船などを使得って三陸海岸を南下し、本作は、その途中の下安家での取材によるものかと思われる。

「こぞはひでりのうちつゞき／たえて稔りのなかりしを」とあるのは、大正十三年夏の旱天が下敷きになっている。『岩手県農業史』（岩手県 昭和五十四年三月）の年表には、「干天40余日に及び、県下各地に水喧嘩起る。干害のため県下畑作5割減収」ともある。

そして、父と姉妹とが渚を急ぐのだが、それについては何も触れられていない。ただ、翌年の夏に妹・シゲと長男の純蔵、末妹・クニと八戸を訪れた際の取材だとされる「八戸」を読むと、この家族にどういう未来が予想されていたのか、また、父親の表情に、なぜ「はてなきうれひ」があったのかも想像がつくように思える。

さやかなる夏の衣して

ひとびとは汽車を待てども

疾みはてしわれはさびしく

琥珀もて客を待つめり

この駅はきりぎしにして

玻璃の窓海景を盛り

幾条の遙けき青や

岬にはあがる白波

南なるかの野の町に

歌ひめとなるならばしの

かゞやける唇や頬

われとても昨日はありにき

かのひとになべてを捧げ

かゞやかに四年を経しに

わが胸はにはかに重く

病葉と髪は散りにき

モートルの爆音高く

窓過ぐる黒き船あり

ひらめきて鷗はとび交ひ

岩波はまたしもあがる

そのかみもうなみなりし日

こゝにして琥珀うりしを

あゝいまはうなみとなりて

かのひとに行かんすべなし

物語めいており、幼い子ども連れで旅行中の賢治が

「歌ひめ」であった女性から身の上を聞くとということが

あったとは考えにくいこともあり、虚構であろうと思われる。「歌ひめとなるならばし」といったものが、本当にあったのかどうか確かめる術はないが、賢治の家の近くの遊廓街・東町（通称・裏町）の蕎麦屋・嘉治屋の主人だった佐々木喜多郎は「芸者や酌婦には八戸（青森）出身者が多かった。親の心情としてあまり近いところでは気まずいし、かといって遠すぎるのは不憫だったのでしよう」と語り、また日出楼茶屋の元・女将の手記にも「娼妓は八戸出身者が多かった」と書かれているという（泉沢善雄「賢治周辺の聞き書き 第十話 三人の先生への追悼 賢治エピソード落穂拾い（7）」「ワルトラワラ 27」ワルトラワラの会 平成二十年五月）。栗原敦（後掲）は「岩手日報」（昭和二年四月十日）の花巻温泉に関する記事に「遊園地の女中がごく一小部分の八戸女のぞき大部分本県うまれの女である」と紹介しており、「南なるかの野の町」が花巻あたりを指していたのは明白で、賢治も八戸出身の芸娼妓や酌婦、女中たちを目にする事が多く、「ならばし」と書いたのも、当然と云えども遠からずといった状況であったように思われる。となれば、「鉛のいろの冬海の」の父親が、早による不作のため、これから姉の身売りにいく途上にあつたのではないかという予想は十分に成り立ちそうだ。

「文語詩篇」ノート」には「大姉」と書かれていたとあるが、おそらくは足を痛めて遅れて付いてくる妹（詩中では「うなぬ」をいたわる優しい姉（詩中では「をとめ」が、今回、身売りに出されるのであろうと思われる。ただ、岩手は翌年も、またその翌年も早に襲われており、おそらくこの妹も数年の後には同じ道をたどったかと思われる。

ところで「鉛のいろの冬海の」に母は登場しない。たまたま描いていなかっただけであるとも、家に残っていたとも考えられるが、二人の娘に父親だけが付き添うというのは、当時としては珍しいことだったのでないかと思われる。

もつと後の時代の話ではあるが、青森県八戸市の小中野新地にあった遊廓の面影を残した旅館「新むつ」の取材記事（花房麗子「かつて、ここは遊郭だった…青森・新むつ旅館と遊女たちの悲しき青春」「現代ビジネス」講談社 令和元年十二月二十四日 <https://gendai.media/articles/-/69392>）には次のような文があつた。

「女郎」と呼ばれた娼妓は、東北の各村から身売りされた女たちだった。芸を仕込むには5〜6歳から始めなければならぬとされており、身売りされた娘たち

の多くはその年齢を過ぎていた。それどころか、時には家長の妻が売られることもあったという。こうした女たちが芸ではなく体を売ったのだ。

「鉛のいろの冬海の」は、文語詩にしては、賢治と思われる視点人物自身の感情が最終連で、ずいぶん多く綴られているように思えるが、それだけに印象が強く、いたましい光景に見えた、ということなのかもしれない。

賢治は翌・大正十三年一月にも甥っ子たちと三陸海岸を訪れたと書いたが、自分自身が子どもを持つことはなかったにしても、賢治にとって血のつながった初めての甥の誕生は、子どもに対する見方を変えることがあったとも考えられる。とすれば、もしかしたら、この詩の背景にも、そうした事情があったと考える事もできるかもしれない。

そして、もう一つ、指摘しておきたいのは、先に三陸紀行に関する「文語詩篇」ノート」のメモを二つ紹介したうち、現在は文語詩化されたと考えられてはいない安家の「寒キ宿ノ娘」が「豚」と呼ばれ、「ナガ行末思へバ心ハ暗シ」と書かれていたことも、本作の生まれた背景になっているのではないかということだ。

たまたま農業を生業としていたために、強い愛情で結ばれながらも一家離散しなければならぬ海辺の親子と、同じ屋根の下で生活できているのに「豚」と呼ばれる娘とでは、どちら幸福なのだろう（宿の娘が「実子」の意味ではなく、「雇われていた若い女性」という意味であった可能性もあるが）。「ナガ行末思へバ心ハ暗シ」という宿の娘に対するコメントは、同時に海辺を歩く娘たちへのものであり、また「あゝかのうれひけふにして／晴れなんものにもせよ／ことなきつねのまどひして／こよひぞたのしからましを」という海辺の娘たちへのコメントは、同時に宿の娘に対するコメントであったのかもしれない。

#### 先行研究

栗原敦「うられしをみなごのうた」（『宮沢賢治 透明な軌道の上から』新宿書房 平成四年八月）

奥田博「文語詩篇ノート・メモ「寒キ宿」のこと」（『宮

沢賢治研究資料探索』蒼丘書林 平成十三年十月）

中川真平「宮沢賢治と三陸海岸（6）」（『こーひーかつぶ 237』太陽企画 平成十四年六月）

81 小祠

赤き鳥居はあせたれど  
杉のうれ行く冬の雲  
野は殿堂の続きかな

よくすかれたる日本紙は  
一年風に完けきを  
雪の反射に知りぬべし

かしこは一の篩にて  
ひとまづそこに香を淨み  
入り来るなりと云ひ伝ふ

雪の堆のなかにして  
りゝと軋れる井戸車  
野は楽の音に充つるかな

大意

鳥居の赤い色は褪せてきてはいるもの  
杉の梢の上を冬の雲が飛び  
野原も社殿の続きのように感じられる

上手に漉かれた和紙でできた紙垂は  
一年も風に脅かされることなく  
雪を反射させる美しさを知るべきだろう

あそこには第一の篩があるが  
まずはそこで身を清め  
入って来るべきだと言い伝えられている

積もった雪の中でも  
井戸車はリリと軋み音をさせて  
野は美しい楽の音に満たされているようだ

モチーフ

小さいながらも立派な神社があり、その様子を書いたものだろう。「一の篩」や「香を淨み」といった詩句の意味するところなどに不明点は残るものの、小祠を称揚する詩のようだ。神道や日本文化を称揚する内容のようにも読めるが、メモされ文語詩化されたのが、三月事件、柳条湖事件、満州事変、十月事件などが起こった昭和六年であったとすると、時局に対する賢治なりの意識が反映されていた可能性も考えるべきかもしれない。

## 語注

**日本紙** 和紙のこと。洋紙では木材パルプを原料として量産されるが、和紙ではコウゾ（楮）、ミツマタ（三桠）、ガンピ（雁皮）などの韌皮繊維を原料とし、植物性粘液を使ったネリを用いて紙漉きされるために、強さと美しさが得られるのだという。それを「風に完けき」や「雪の反射に知りぬべし」という言葉で表そうとしたのだとも考えられる。下書稿(一)に「斜めに切りて吊したる／白紙」ともあるので、稲妻型の紙垂のことを指すのだろう。

**一の篩** 下書稿(一)の段階では「かしこは一の篩なり／入り来るものの総身を／まづはかしこに浄むなり」とあり、この部分は会話を示す「」で括って書かれていることから、詳細は不明ながら、こうした戒律のようなものがあつた神社をモデルにしていたのである。『世界大百科事典』によれば、「ふるいはざる、籠、箕などと同様に、背がのびなくなる、できるものができるなどといって、ふだん頭にかぶることが禁じられている。これらの道具類には、網目や格子状に組まれた竹などの間から外が見通せるといふ共通点がある。このため、これをかぶれば異界が見通せ、さらに

この世のものでなくなると信じられたのである。このようなふるいの性質は、昔話の〈隠れ簀〉で、男が竹筒やふるいを目にあて遠くが見えるといつて天狗の隠れ簀をだましとると語られたり、子どもが神隠しにあつたときに、ふるいをかぶって子どもを呼べば出てくるとか、子どもを捜すときに、ふるいを首にかけて行き、その網目からのぞくと子どもが見えるなどという伝承にもみることができるとのこと。こうした民俗との関わりがあつたのかもしれない。また篩と「香」との関連から考えてみると、線香の燃えかすを取り除く際に篩が使われるとのことだが、神社とはそぐわない。また、伽羅などの香木を粉末にして篩にかけることもあるようだが、やはり神社との関係は定かではない。「香を浄み」は、「身を浄め」に意識した。

## 評釈

「王冠印手帳」の五一・五二頁に書かれた下書稿(一)、黄野(220行)詩稿用紙に書かれた下書稿(二)(手入れ段階で「小祠」のタイトル。右肩に藍インクで㊦)の二種が現存。

「王冠印手帳」について『新校本全集』では「七頁く八頁・五七頁く五八頁は、東北砕石工場の辞令を受けた昭和六年二月十七日前後のメモと考えられるので、この手帳の使用はほぼこの時期から始まったものと推定される」とある。したがって五一・五二頁は、場所から考えて、ほぼその頃のものだということになる。

四三頁には「あらたなるよきみちを得しといふことは／たゞあらたなるなやみのみちを得しといふのみ」とあり、四五頁には「肥料屋の用事をもって／組合にさこそは行くと／病めるがゆゑにうらぎりと／さこそはひとも唱へしか」なども書かれており、仕事を初めて早々に限界を感じていたようだ。

この頃の賢治は、盛岡や砕石工場のあった松川、秋田などに精力的に出張しているため、どこでの取材なのかはわからない。年譜を参照しても土日であつても休まずに仕事に関わっていることが確認でき、そんな仕事ぶりがたたったのか四月十一・十二日にはついに発熱・臥床している。砕石工場での仕事は、賢治にとって意義のある仕事であつたことはもちろんながら、必ずしも満足のいくものではなかつたことは手帳に「よきみちを得し」としながら、「たゞあらたなるなやみのみちを得しといふのみ」とあるとおりだが、本作に関して言えば、特に

仕事への不満を綴つたものではなく、出張の合間に小祠で休憩でも取つた際の感想で、雪の中のうらさびれたように見えた祠だが、井戸車がリリと軋る、つまり凜々しく、端然としたもののように聞こえたという讚美の意が込められたもののようなのである。

王冠印手帳に書かれた下書稿(一)から見ていきたい。

やゝあせ染めし赤鳥居

杉のうれ行く冬の雲

雪の反射のなかにして

斜めに切りて吊したる

白紙幾日か完しと思ふや

「かしこは一の篩なり

入り来るものの総身を

まづはかしこに浄むなり」

はるか雪のなかにして

りゝと軋れる井戸車

紙面が改められた下書稿(二)でも、手帳に書かれてからの時間が短かいたためか、内容にも大きな変化はないようだ。

ただ、下書稿(二)への手入れ段階で、「やゝあせ染めし赤鳥居」とのみ書かれていた祠について、「野は殿堂の



続きかな」と、祠を称賛する方向での書き換えがなされ、また「白紙幾日か完しと思ふや」という紙垂についての、やや批判的な、揶揄するような文言が、「よくすかれたる日本紙」と、その神社と、和紙について称賛するような内容に書き換えられている。また、最終行は「野は楽の音に充つるかな」と美しくまとめられている。

こうした一連の書き入れについて少し気になるのは、もともと神社を賛美する詩であったようだが、未定稿に留まったとはいえ、最終段階で日本的なものをより好意的に書き改めているように受け取れる、ということだ。

昭和六年九月十八日、奉天郊外の柳条湖で南満州鉄道の線路が爆破された事件（実際は関東軍による自作自演）をきっかけに満州事変が起こると、政府は事態不拡大の方針を取ろうとするが、容易に収まらず、『世界大百科事典』によれば「国民に対しては柳条湖事件の真相は太平洋戦争敗戦後まで秘匿され、軍部の発表をうのみにした新聞、ラジオなどマスコミのセンセーショナルな報道や、軍部が在郷軍人会の組織を動員して全国に展開した国防思想普及運動などによって、反中国・反連盟・反欧米の排外主義が急激に形成され、日本軍への慰問、国防献金、集会などによる〈国論喚起〉、従軍志願など

が続出し、不拡大方針を掘り崩す役割を演じた」といった事態となった。

下書稿(二)がいつ書かれたのか、また、手入れがいつなされたのか正確にはわからない。「王冠印手帳」に下書稿(一)が書かれたのが「昭和六年二月十七日前後」。同年九月十八日に満州事変は起こっているが、その報せが日本で報道された二十日には、賢治は東京で発熱して病床に就いており、花巻に戻ってから、とても原稿の推敲などはできなかったことと思われる。

島田隆輔『宮沢賢治研究・文語詩稿・叙説』（朝文社平成十七年十二月）は、昭和七年には病状がやや回復し、これまでの自伝の文語詩化から大きく方向転換した再編段階に移行するとし、「再編段階にも、初期稿（〈了稿〉）が発展してゆく場合が多くある。けれどもそれらは〈了稿〉の後継なのであり、再編の段階にその「了」印を得たものではないし、「了」印を新たに与えられる、ということもない」としている。となると、昭和六年の間に①の付けられた下書稿(二)に昭和七年になって手入れが行われたとすることは、一応、考えてみることはできそうだ。ただ『新校本全集』によれば、藍インクで書かれた下書稿(二)は、「同じインクで次の手入れがなされている」とあり、①印も藍インクで付されている

とのことなので、どれも昭和六年中に、つまり満州事変以前に書かれたものである可能性もある。

ともあれ、この時期の満州事変に関する論調を『読売新聞』のデータベースから拾ってみると、昭和六年十一月十五日には、「国民の『熱誠』！ 時局に送り出す」

として立教、専修、慶応、早稲田、中央、国士館等の大學生有志が組織した満蒙慰問連盟が街頭で募金活動を行ったこと、また、少年団日本連盟が「勝餅」を満州に送ったことが報じられている。同年十一月二十一日には

「可憐な少年少女」が「満州の兵隊さんに何か買って上げて下さい」とお小遣いを出し合ったという記事、細民街からの贈り物、「裁判所の守衛と小使いさん」からの献金の記事が掲載されている。同年十一月二十二日には「五本指の血判して『ぜひ戦地看護婦に』」という見出し、同年十一月二十八日には「妙齢の一女性初の月給を……」という見出しが掲載され、こうした記事が連日掲載されている。

この延長に昭和八年八月三十日、満州派遣歩兵第三十一連隊第五中隊にいた伊藤与蔵に送った書簡を置くとうなるだろうか。

軍務ご多端の中らご丁寧なお手紙を下さいまして厚くお礼申しあげます。

何よりまづ激しいご勤務炎熱の気候にも係らず愈々御健勝で邦家の為にご精勤の段至心に祝しあげます。

いろいろそちらの模様にては、弟への度々のお手紙また日報等に於る通信記事、殊に東京発刊の諸雑誌が載せた第二師団幹部とか、従軍記者達とかの座談会記録に仍て読んで居りますが、実に病弱私のごときただ身顛ひ声を呑んで出征の各位に済まないと思ふばかりです。

然しながら亦万里長城に日章旗が翻へるとか、北京（昔の）を南方指呼の間に望んで全軍傲らず水のやうに静まり返つてゐるといふやうなことは、私共が全くの子供のときから、何べんもどこかで見た絵であるやうにも思ひ、あらゆる辛酸に尚よく耐えてその中に参加してゐられる方々が何とも羨ましく（と申しては僭越ですがまあそんなやうに）感ずることもあるのです。

殊に江刺郡の平野宗といふ人とか、あなたとか、知つてゐる人たちも今現にその中に居られるといふやうなこと、既に熱河錦州の民が皇化を讃へて生活の堵に安じてゐるといふやうなこと、いろいろこの三年の間の世界の転変を不思議なやうにさへ思ひます。

この書簡について、栗原敦（「手紙の読み方 伊藤与藏あて宮沢賢治書簡について」『宮沢賢治探究 上』蒼丘書林 平成二年七月）は、これをもって賢治を天皇制イデオロギーに染まっていたと解するのは単純すぎると警鐘を鳴らしている。文体に伝聞調や「やうな」といった臃化表現を用いていること、従軍中であつた伊藤に送つたので検閲の目などを気にする必要もあつただろうこと、伊藤が羅須地人協会のメンバーであつたことについて論じており、確かにそのとおりであろうと思われる。

拙著『「百篇評釈」において、「百篇」の「コバルト山地。」の下書稿に「県知事須藤三右衛門」が列車の中で「太きシガーをくゆら」せた記述があることについて、当時の県知事・石黒英彦との関係を類推し、岩手県から満蒙開拓団に四十一名もの参加者があり、こうした動きについて賢治が批判的だったのではないかと書いた。今もなお、そうした解釈は可能だとは思ふが、賢治が熱心に天皇制イデオロギーを信奉したとは言えないにしても、そう思われかねない文章を書いたことも事実であり、また、万里の長城に日章旗が翻るのを子どもの時にイメージしていたことなどは、検閲があるためにわざ

わざ書き加えたものというより、素朴な愛国心が発露したものと考えるべきではないか、とも思ふのである。

伊藤宛書簡にあるように「弟への度々のお手紙また日報等に於る通信記事、殊に東京発刊の諸雑誌が載せた第二師団幹部とか、従軍記者達とかの座談会記録に仍て読んで居ります」というのが当時の賢治の情報ソースであつたことを思えば、いくら作品中で「ケンクワヤソシヨウ」を嫌い、反戦や平和を説き続けた賢治だからと言つて、「新聞、ラジオなどマスコミのセンサーショナルな報道や、軍部が在郷軍人会の組織を動員して全国に展開した国防思想普及運動などによって、反中国・反連盟・反欧米の排外主義が急激に形成され」（『世界大百科事典』）たというような流れから完全に自由であつたとすることは難しいように思われる。

有馬学（「「非常時」の表と裏」『日本の歴史 23 帝国の昭和』講談社学芸文庫 平成二十二年五月）は、満州事変以降の日本社会全般について「ナシヨナリズムの新しい形式による表現が、社会のさまざまな側面を覆いつくした」状況だという。たとえば無産政党であつた社会民衆党の赤松克麿は「国家統制経済による一国社会主義的な国家（国民）社会主義の形態をとり、満州事変については満蒙権益の労働者管理を唱え」、民政党を脱

党した中野正剛や安達謙蔵らは国民同盟を結成し「国民同盟は日本建国の精神を拡充し、外に国際正義を検討して、屈辱なき恒久平和の基準を定め、うちに統制経済を確立して、搾取なき正義社会を建設するをもって目的とす」と書いており、いずれも国民のための満州権益を正当化していると指摘する。

有馬（「プロローグ 過去は外国である」前掲書）

は、戦前期とは「だれも戦争それ自体が愚かだとも悪だとも思っていないなかった」時代であり、「今日の日本において、戦争そのものが絶対悪であるという価値観は、多くの人にとって当然の前提であり、認識枠組みの基本である。しかし、昭和戦前期という〈過去〉においては、それとは異なる価値観の枠組みがあったとしても不思議ではない。だが、われわれが〈過去〉に向き合うとき当然意識されるべきこの距離感、昭和戦前期という比較的新しい〈過去〉に対しては、往々にして忘れられてしまふ」と書いているとおりである。

本作の改作だけから昭和初年の賢治の政治的な意識を論じてしまうのは早計であろう。また、手入れのタイミングから考えれば、満州事変の影響を見出すのは物理的にも危ういのは事実である。ただ、それでも満州事変について書いてきたのは、単に一篇をどう解釈するかとい

うだけの問題に留まらず、わざわざ天皇制イデオロギーや田中智学の国体学といったことを持ち出さなくとも、特別な情報網を持つていたわけでもない賢治が、日本全体を覆っていたナシヨナリズムの空気から自由であったと言いつける根拠が乏しいということを自戒を込めて言及しておきたかったためである。ことに文語詩の推敲に集中していた最晩年に、新聞や雑誌では戦争報道と庶民たちの支援の声が毎日のように踊っていたことを思うと、間接的にはあっても、何がしかの影響があったと考える方が自然ではないだろうか。

### 先行研究

なし

### 82 対酌

嘆きあひ　酌みかふひまに  
灯はとぼり　雑木は昏れて  
滝やまた　稜立つ巖や

雪あめの ひたに降りきぬ

「ただかしこ 淀むそらのみ  
かくてわが ふるさとにこそ」  
そのひとり かこちて哭けば  
狸とも 眼はよほみぬ

「すだけるは 孔雀ならずや  
ああなんぞ 南の鳥を  
ここにきて 悲しましむる」  
酒ふくみ ひとりも泣きぬ

いくたびか 鷹はすだきて  
手拭は 雫をおとし  
玻璃の戸の 山なみをたゞ  
三月のみぞれは 翔けぬ

### 大意

嘆き合い 酒を酌み交わす間に  
電灯が点き 樹木も日暮れて  
滝やまた 角の立った岩  
みぞれは ひたすらに降って来る

「ただあそこ 淀んだ空の彼方にある  
このようにして私の ふるさとこそが……」  
その一人が 愚痴って大声で泣き  
狸のように 眼もすっかり勢いを失ってしまったている

「鳴いているのは クジャクだろうか  
ああどうして 南の鳥を  
この北国にまで呼び寄せ 悲しませているのだろう」  
酒を口に含んで もうひとりも泣いている

いくたびか 鷹も鳴いて  
手拭いは 雫を落とし  
ガラス戸は 山並みをただ映し  
三月のみぞれが 落ちてきている

### モチーフ

大正七年三月、盛岡高等農林学校から除籍処分を受けた  
保阪嘉内と賢治を語るものとされる。伝記的には妥当  
なようにも思えるが、孔雀がいたのは花巻温泉で、まだ  
その頃はできていない。ただ、モデルとなっている可能  
性是否定できない。去る者と残る者のセリフは解しにく

いが、去る者が「ふるさとにこそ」と言うのは、保阪が故郷の未来に望みを託していたため。また、残る者が、孔雀の話を持ち出すのは、故郷に戻れない孔雀の悲しみを語るとともに、花巻温泉で働いていた「籠の鳥」である「たはれめ」たちもイメーシされていたのだろう。さらに、そんな花巻温泉で花壇設計などを行った自分自身に対する苦い思いも込められていたと考えることもできるかもしれない。

### 語注

**対酌** 向かい合って酒を酌み交わすこと。

**かこちて** 「かこつ」は「託つ」と書き、かこつけること。『日本国語大辞典』によると、「(1)あまり関係のないことをむりに結びつけて理由とする。他のせいにする。口実とする。かこつける」、「(2)心が満たされないのを何かのせいにして恨み嘆く。ぐちを言う。嘆いて訴える」、「(3)弱い立場のものを守り、大切にする」の意味が載っているが、前後関係から考えれば(2)が納得しやすい。恨み言、愚痴を言っていたのだろう。

**よぼみぬ** 「よぼむ」は各種辞典にも載っていない。

「よぼよぼする」「よぼける」との類似や文脈から、涙で眼が濡れて勢いを失った様子だろう。

**孔雀** キジ科の大型鳥類。インドや東南アジアなどに生息する。オスの長い上尾筒は、先端に目玉のような模様があり、光沢のある美しいもので、求愛のディスプレイの際などに広げられる。仏教ではこの美しい孔雀が毒蛇を食するということから神格化され、密教においては孔雀明王を本尊として除災・祈雨を願った。賢治はその美しさと共に、仏典からの知識からクジャクを登場させている。花巻温泉の水禽園では、クジャクやペリカンや鷹、フクロウ、七面鳥、ホロホロ鳥、コウノトリなどと共に飼われており、賢治はここをイメーシしていたのだろう。「一篇」の「老いては冬の孔雀守る」でも花巻温泉の孔雀が登場する。

### 評釈

黄野(22 22行) 詩稿用紙に書かれた下書稿一種が現存(タイトルは「対酌」)。手入れにおいても大きな変更はない。

大明敦(後掲)は、盛岡高等農林学校時代の友人・保阪嘉内が同人誌「アザリア」に発表した文章の中に「おれ

は皇帝だ」「帝室をくつがえす」「ナイヒリズム」などの言葉があったことなどから保阪は大正七年三月に盛岡高農から除名処分を受け、「賢治は、嘉内を花巻の大沢温泉に誘った。そこで、志半ばで学校を追われ失意に暮れる友と盃を交わした。賢治の晩年の作である文語詩

「対酌」は、この時の情景をうたったものである」とする。年譜を開いてみると、確かに「ふるさと」を思う友と酒を酌み交わすような経験といえ、保阪との関係が想起されるのは当然であるように思えるし、「三月」という季節も一致している。

盛岡高等農林学校では大正七年三月十三日に学年試験合格者発表を行ったが、その際に保阪の学籍除名が明らかにになり、賢治は山梨の実家にいた保阪に書簡を書き、十四日前後に送付している。保阪は賢治の書簡から除名を知り、急遽盛岡に来るが、処分は撤回にならなかつた。賢治は三月二十日前後に、保阪に宛て、再度書簡を送っており、そこには「先日は忙しく御別れいたしました。最早御無事で御帰京の事と存じますが、御着きになつたらどうか御知らせ願ひます」とし、自分だけ卒業してしまったことを詫びている。

つまり、賢治と保阪が三月十七日から十九日くらいまでの間に盛岡で会っているのは確かなようである。しか

し大沢温泉で孔雀が飼われていたということはないようで、孔雀が飼われていたことが明らかな花巻温泉は、まだ開発されていない。孔雀部分のみが虚構の可能性もあるが、賢治が「先日は忙しく御別れ」したと書いているのに、まだ電車も開通していなかった大沢温泉に出向いて、対面で賢治と酒を酌み交わした可能性は、きわめて低いと言わざるを得ない。では、盛岡近郊の温泉宿での経験かということになりそうだが、除籍処分で駆け回っている最中にしては長閑にすぎるし、対面で酒を酌み交わすということも、賢治の日頃の行いなどからすると違和感が残る。したがって保阪と賢治の別れをモデルとしながら、花巻温泉が舞台となるなどの虚構も含まれながら成立したものだと考えておくことにしたい。

こうしてみると分かりやすい詩のようにも思われるが、気になるのは第二連と第三連に埋め込まれた保阪と賢治と思われる人物の会話がかみ合っているように思えず、内容もたどりにくいことだ。

第二連の「ただかしこ 淀むそらのみ／かくてわがふるさとにこそ」だが、この「こそ」に何が込められているのかがわかりにくい。『デジタル大辞泉』によれば、「こそ」について「ある事柄を取り立てて強める意を表す」とあったが、それに従えば自分の故郷を限定し

て強調しているということになる。ただ、志なかばにして故郷に追いやられる存在が、「故郷こそが」と、まるでそこに行くことが本来の望みであったように泣きながら語るといのは理解しにくい。

ただ保阪庸夫・小沢俊郎『宮沢賢治 友への手紙』

(筑摩書房 昭和四十三年六月)の「解説」には、「盛岡高農に入学する際、嘉内には具体的な目的があった。農学を修めて故郷に帰り村長となる事、土地を改良し、農村副業を興し、多角経営、協同組合組織を基礎にした模範農村を築く事である。此の理想村には彼の好んだ芝居等を演ずる農民館、図書館、体育場から村立病院迄が存在する筈であった」とのことであり、それならば「ふるさとにこそ」はわからなくもない。推敲途中の原稿であるために、うまく整理できていなかったということなにかもしれない。

そして次の連における「対酌」の相手の言葉だが、こちらでも友の帰郷を悲しんですすり泣いているようだが、「すだけるは 孔雀ならずや／ああなんぞ 南の鳥を／ここにして 悲しましむる」という内容は、友人の「ふるさとにこそ」という言葉とかみ合っていないようにも感じられる。君は故郷に帰れるが、故郷に帰れないものもいる、という例で例に挙げたのかもしれない。あまり

整理ができていないように思われるが、いずれにせよ高村光太郎の「ぼろぼろな駝鳥」が下敷きになっていたことは確かであるように思う。これは昭和三年三月に草野心平の主筆した「銅鑼 14」に掲載された詩で、賢治は同誌の4、10、12、13に作品を発表していること、また、賢治が光太郎を慕っていたということから、賢治が目にしていたのは確実かと思われる。

何が面白くて駝鳥を飼ふのだ。

動物園の四坪半のぬかるみの中では、

脚が大股過ぎるぢやないか。

頸があんまり長過ぎるぢやないか。

雪の降る国にこれでは羽がぼろぼろ過ぎるぢやないか。

腹がへるから堅パンも喰ふだらふが、

駝鳥の眼は遠くばかりみてゐるぢやないか。

身も世もない様に燃えてゐるぢやないか。

瑠璃色の風が今にも吹いて来るのを待ちかまへてゐる

ぢやないか。

あの小さな素朴な頭が無辺大の夢で逆まいてゐるぢや

ないか。

これはもう駝鳥ぢやないぢやないか。

人間よ、



もう止せ、こんな事は。

賢治が檻の中に飼われた駝鳥の詩にインスパイアされ、花巻温泉の檻の中に飼われた孔雀を連想したというのは、十分にありえることのように思われる。

さらに、花巻温泉が舞台であったとすれば、賢治は「籠の鳥」、ただ文字通りに籠の中にいる飼鳥のことを意味するだけでなく、自由を束縛された存在としての「籠の鳥」、つまり「遊女。郭から出られず、年季、借金などに縛られ、格子窓の中に居て客を引いたりすることなどからいう」(『日本国語大辞典』)を連想した可能性もありそうだ(大正末年には流行歌および映画「籠の鳥」もヒットしていたという)。

花巻温泉は大正十二年、台温泉から湯を引いて昭和二年に兵庫県之宝塚温泉に匹敵するリゾートを設置したいという金田一國士の思いから、温泉と宿泊施設はもちろん、貸し別荘や遊戯場、動物園、テニスコート、プール、ナイタースキー場などを設置した大規模な施設で、園芸部主任であった教え子・富手一の依頼もあって賢治もこの花壇設計を担当した。

花巻温泉は「日本新八景」のコンテストで一位となるくらいのレジャーランドとなったが、「詩ノート」の

「二〇五五 「こぶしの咲き」 五、三、」で、賢治は

「この巨きななまこ山のはてに／紅い一つの擦り傷がある／それがわたくしも花壇をつくつてある／花巻温泉の遊園地なのだ」と書いている。ここを「擦り傷」と呼んだのは「詩ノート」の「一〇三四 「ちぎれてすがすがしい雲の朝」 一九二七、四、八」に、「遊園地ちかくに立ちしに／村のむすめらみな遊び女のすがたとかはりぬ／そのあるものは／なかばなれるポーズをなし／あるものはほとんど完きかたちをなせり」ともあるように、花巻温泉が多くのお芸妓をも迎えた遊興の地でもあったためだ。「未定稿」では、ここを「賤舞の園」(「歳は世紀に會つて見ぬ」)と書いた例もある。

「二百篇」の「「老いては冬の孔雀守る」」は、花巻温泉を舞台にして孔雀の飼育係として働く老人を書いた文語詩だ。

① 老いては冬の孔雀守る、 蒲の脛巾はばきとかははろも、

園の広場の午戸な時は、 湯管たのむせびたたほのか。

② あるひはくらみまた燃えて、降りくる雪の縞なすは、  
さは遠からぬ雲影の、 日を越し行くに外ならず。

「老いては冬の孔雀守る」について『「百篇評釈」  
で、花巻温泉では孔雀が囚われているというだけでな

く、多くのたはれめたちも囚われたままだというアレゴ  
リーについて指摘したが、「対酌」における涙は、故郷  
に帰る友人との別れにだけ注がれたものではなく、故郷  
に戻ることができない孔雀への涙、そして、同じように  
故郷に戻ることのできないたはれめたちへの涙について  
詠んだものではないだろうか。

いや、もしこれが賢治の昭和二年における思いを吐露し  
たものであったとすれば、「酒ふくみ ひとりも泣きぬ」  
とあるのは、そんな花巻温泉を批判している自分自身が、  
花壇設計などで花巻温泉の経営に加担していたという居心  
地の悪さに対する涙でもあったかもしれない。

本作は「百篇」に定稿として、「老いては冬の孔雀  
守る」が収められていることから、テーマや舞台の類  
似性から未定稿に留め置かれた可能性、また逆に「対  
」として発展させるつもりがあったが、それが実現できな  
かったために未定稿に留め置かれた、ということであつ  
たのかもしれない。しかし、いずれにせよ去る者と残る  
者の会話のズレもしつくりしておらず、盛り込みたい詩  
想と言葉がうまくかみ合わず、その未整理ぶりが未定稿  
に留まらせたとも考えられよう。

## 先行研究

大明敦「保阪嘉内の生涯」(『心友 宮沢賢治と保阪嘉内

花園農村の理想をかかげて』山梨ふるさと文庫 平成

十九年九月)

江宮隆之「退学処分」(『二人の銀河鉄道』河出書房新社

平成二十年二月)

大角修「青い孔雀のものがたり」(『宮沢賢治』の誕

生』河出書房新社 平成二十二年五月)

小林俊子「詩歌」(『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびし

さ』勉誠出版 平成二十三年八月)

信時哲郎「老いては冬の孔雀守る」(『「百篇評釈」

## 83 不 軽 社 並 口 薩 摩

あらめの衣身にまとひ  
城より城をへめぐりつ  
上慢四衆の人ごとに  
菩薩は礼をなしたまふ

(われは不軽ぞかれは慢

こは無明なりしかもあれ  
いましも展く法性と  
菩薩は礼をなし給ふ

われ汝等を尊敬す  
敢て軽賤なさざるは  
汝等作仏せん故と  
菩薩は礼をなし給ふ

(ここにわれなくかれもなし  
たゞ一乗の法界ぞ  
法界をこそ拝すれと  
菩薩は礼をなし給ふ)

この無智の比丘いづちより  
来りてわれを軽しむや  
もとよりわれは作仏せん  
凡愚の輩をおしなべて  
われに授記する非礼さよ  
あるは怒りてむちうちぬ

### 大意

粗めの衣を身に纏い  
城から城へと歩きまわりながら  
高慢な比丘や比丘尼・優婆塞・優婆夷に会うたびに  
菩薩は恭しく礼をされる

(私は不軽で彼らは増上慢  
こうして区別をすることは誤りで  
今こそ法性が顕現するのだと  
菩薩は礼をされるのであった)

私はあなた方を尊敬します  
敢えて軽んじ賤しめるようなことをしないのは  
あなたがたが仏になるためですと  
菩薩は礼をされるのであった

(ここにはもはや我も彼もなく  
ただ一つの法界があるだけで  
その法界こそを拝んでいるのだと  
菩薩は礼をされるのであった)

この無知の比丘はいったいどこから

やってくるには私を軽んじるのだろうか

私が仏になるのは当然のことなのだが

愚かな人々と同じ扱いをして

この私に教えようなどという非礼さは驚くばかりだ  
ある者は怒って菩薩を鞭打ちもした

### モチーフ

「雨ニモマケズ手帳」に書かれたメモから発展した文語詩。法華経に登場する不軽菩薩を詠んでいるが、賢治の経験や見聞などを含まない純粹な信仰詩だという点で、極めて異色の作品。晩年の賢治の心境を示したものとも思えるが、未定稿に留め置かれたのは岩手での取材ではないこと、宗教が前面に出過ぎていて、そして、自身の方が不軽菩薩とおよそかけはなれていたための遠慮もあつたのかもしれない。

### 語注

**不軽菩薩** 『法華経』の「常不軽菩薩品第二十」に登場する菩薩のこと。常不軽は「常に軽視されない、常に軽視しない、の意」（『広説仏教語大辞典』）。大成国の像法の時代に一人の比丘（男性出家修行者）が、

四衆（比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。すなわち出家した男性・女性修行者、また在家の男性・女性修行者のこと）に出会う度に、「我れ深く汝等を敬う。敢えて軽慢せず。所以は何ん。汝等は皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べければなり」と言つて、礼拝だけした。遠くに四衆を見かけただけでも讃嘆し礼拝したため、四衆の中にはこの比丘に腹を立てるものもあり、瞋りの心を起して悪口罵詈し、杖木で打つたり瓦石を投げるものもあつたが、それでも比丘は礼拝讃嘆をやめようとしなかつた。四衆たちは、自分たちがからかわれているのだと思つて、この比丘を常不軽と綽名をつけて軽蔑した。その比丘は、没する際に法華経の偈を聞き、これを受持したので六根清浄の功德を成就して寿命が延び、法華経を説いた後に成仏した。これが釈迦牟尼仏である。増上慢の比丘たちは無間地獄で苦しんだ末に、常不軽菩薩の教えを受けて成仏することとなり、法華経の会衆となつた。日蓮は人々から疎まれながらも法を説く不軽菩薩を手本とし、折伏（相手を屈伏させて正道に就かせようとする布教方法）の実施を主張した。近代に至ると廃仏毀釈を意識して、日蓮宗は穩健な立場をとるが、本来の日

蓮の姿勢に戻るべきだとして在家仏教運動を始めたのが国柱会の田中智学であった。

**あらめ** 漢字で書けば「粗目」、目の粗い、粗末な衣服の意味だろう。田中良則（後掲A）はシヤカの時代に比丘たちが着用していた糞掃衣ふんそうえだとするが、「海藻の荒布を乾燥した、食材に用いる「あらめ」のことで、そのあらめのような色彩（灰黒色）と質感をもった衣」という意味と考える」とするのは、舞台として古代インドが想定されているとすると、ふさわしくないように思う。

**無明** 「むみょう」と読み、『岩波仏教辞典』によれば「人生や事物の真相に明らかでないこと、すなわち、すべては無上であり固定的なものはない（無我）」という事実には無知なこと。この無明がもとで固執の念（我見）をおこし、さらに種々の煩惱の発生となる」。ただ、富山英俊（後掲）が書くように、ここで無明とされているのが、「われは不軽ぞかれは慢」とあるうちの「かれ」、つまり四衆を指し、不軽菩薩を軽蔑することを批判しているのではなく、「われは不軽ぞかれは慢」とある両方を指して、「われ」を「かれ」と二分すること自体を無明としている、との説を取るべきだと思われる。四連目に「ここにわれなくか

れもなし」とあること、また賢治も参照したと思われる日蓮の講義録「御義口伝」の第廿三に「不軽は善人、上慢は悪人と、善悪を立つるは無明なり」ともあつたためである。ただし「御義口伝」は日蓮の高弟・日興が法華経の講義を筆録したものだと言われるが、『世界大百科事典』には「最近では書誌学的・教学的考察から偽撰説が定着しつつある」とのこと。

**作仏** 「さぶつ」と読み、仏になること。仏像を作る。「さくぶつ」とは別。

**一乗の法界** 『世界大百科事典』には「一乗」の意味として、「一つの乗りものという意味である。一仏乗のことで、三乗（声聞乗、縁覚乗、菩薩乗）に対する語。衆生を乗せて悟りにおもむかせる教えにたとえたもの。仏陀は人間の素質や能力に応じて種々の説（三乗）を説いたが、それらは人びとを導くための方便にすぎず、実は唯一つの真実の教えがあるのみで、それによつていかなる人間もすべて平等に仏に成ることができる」と説く」とある。また、「法界」（「ほっかい」とも「ほうかい」とも読む）については、「仏教用語としては種々の意味に用いられるが、もつとも重要なのは大乘仏教における意味である。すなわち、この全宇宙は全存在が互いにおかしあうことなく秩序を

保って存在するから、また、全宇宙は正しく真理

（法）のあらわれであるから、法界と呼んだ。さらに、このような存在、すなわち全宇宙の現実のありのままの相（すがた）と、全宇宙をしてそのようにあらしめているもの、すなわち真理を意味した。いいかえると、法界は現実界そのものと、真理・真如（しんによ）の両義を含んでいる」とある（『世界大百科事典』）。賢治が読んでいたと思われる日蓮の講義録

「御義口伝」の第廿九には「法界に立て礼拝するなり、法界とは広きに非ず狭きに非ず、惣じて法とは諸法なり、界とは境界なり、地獄界乃至仏界各界を法の間、不輕菩薩は不輕菩薩の界に法り、上慢の四衆は四衆の界に法るなり、仍て法界が法界を礼拝するなり、自他不二の礼拝なり、其の故は、不輕菩薩の四衆を礼拝すれば、上慢の四衆所具の仏性又た不輕菩薩を礼拝するなり、鏡に向つて礼拝を成す時浮べる影又我を礼拝するなり」とあり、これを典拠にしているのだろう。「雨ニモマケズ手帳」の一三八頁にも「法界法界ヲ礼拝するなり／住忍辱地／住忍辱地」とあるが、この「住忍辱地」も「御義口伝」の第卅に「御義口伝に云く、既に上慢の四衆罵詈瞋恚を成して、虚妄の授記と謗すと云へども、不生瞋恚と説く間、忍辱地に住

して礼拝の行を立つるなり」を典拠にしているものと思われる。この「御義口伝」は日蓮の高弟であった日興が法華経の講義を筆録したものだと言われるが、『世界大百科事典』には「最近では書誌学的・教学的考察から偽撰説が定着しつつある」とあり、「中古天台の影響をうけて、日興門流のなかで室町時代に成立したと考えられ、日蓮には見られなかった本覚思想にもとづく強い観心主義の傾向がある」とも言う。もちろん富山（後掲）が言うように、賢治がこうした近年の研究成果を知る由もなく、日蓮の言葉として重要視していたと考えられる。富山は賢治の法華経理解に本覚的（「その思想の特徴は、あるがままの現象世界をそのまま仏の悟りの世界と見るところにある」『岩波仏教辞典』）に捉える傾向があったと指摘するが、その通りであるように思われる。

### 評釈

「雨ニモマケズ手帳」に書かれた下書稿（『新校本全集』では、タイトル案とも思われる「不輕菩薩」の文字が書かれる前と書かれた後に分かれていることから前者を「A」、後者を「B」と仮称している）、「未定稿」の「鉛のいろの冬海の」が書かれた黄野（22

0行) 詩稿用紙の下部に書かれた下書稿(二)、黄野(22行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(三)(タイトルは「不軽菩薩」)の三種が現存。ただ、須田浅一郎(後掲A、B、E)や島田隆輔(後掲)、富山英俊(後掲)は先後関係は何通りか考えられるはずだとしており、その指摘も納得できるところがある。

先行研究のない詩も多い「未定稿」の中で、本作は例外的に先行研究の数が多く、賢治の法華経への信仰の深さが窺えること、そして「雨ニモマケズ手帳」の七〜七四頁までに不軽菩薩を劇化する意図があったとも思われる。「土偶坊」の構想メモがあり、タイトルの脇には「ワレワレカウイフモノニナリタイ」と書かれていたのも注目された理由だろう。というのも「雨ニモマケズ手帳」の五〜六〇頁には「〔雨ニモマケズ〕」が書かれ、そこには「ホメラレモセズ／クニモサレズ／サウイフモノニ／ワタシハナリタイ」と、本作と酷似する表現があったためだろう。不軽菩薩と「〔雨ニモマケズ〕」では食い違ふところもあるし、「土偶坊」とも、さらに異なる側面はあるが、自分のことは後回しにして他人を気にかけて、怒るといふことをしないとといった点に共通性があり、賢治の晩年の境遇と重ねられる読み方がなされてきた。

杉浦静(後掲A)は「〔雨ニモマケズ〕」の詩稿に「行ッテ」と手入れた赤鉛筆が「不軽菩薩」で使用したものと同じであることから、「不軽菩薩」は、追われても罵られても、いつのまにか現れ出てきて人の中にある仏性を拝する菩薩を描いたもので、ここでの菩薩の行動性に、「雨ニモマケズ」の「行ッテ」に共通するものが感じられる。「不軽菩薩」の執筆が、「雨ニモマケズ」への書き入れを惹起したと想像してもよいのではなからうか」としているが、関連は強かったものと思われる。

さて、制作順序についてはともかくとして「雨ニモマケズ手帳」に書かれた下書稿(一)とされるものから見てみたい。「雨ニモマケズ手帳」の一〜二〜三四頁に書かれているが、五一頁からは昭和六年十一月三日の日付のある「〔雨ニモマケズ〕」が書かれていることから、六年の年末から七年の年始にかけて書かれたのだろう。

あるひは河原石さてはまた

刀杖もつて追れども

見よその四衆に具はれる

仏性なべて拝をなす

## 不軽菩薩

菩薩四の衆を礼すれば

この無智の比丘いづちより  
来りてわれを礼するや

我にもあらず衆ならず

法界にこそ立ちまして

たゞ法界ぞ法界を

礼すと拝をなし給ふ

法華經に書かれているとおりのようにも思えるが、島田（後掲）らの指摘があるように、最終連は法華經に対応する箇所はなく、語注にも書いたように日蓮の講義録と考えられていた「御義口伝」の「常不軽品三十箇の大事」に対応した内容となっている。

下書稿(二)の初期形態は次のようなものである。

かれは上漫われは信

これ元品の無明なり

すなはちこれを歸命すと

菩薩は礼をなしたまふ

『新校本全集』では「元品」のところに「[?]」と

あつたが、『新校本全集 16 (上) 補遺・資料篇』の

「各巻校異補遺・校異訂正」で修正されている。杉浦静

(後掲B)は、その経緯について書き、「元品の無明」

について田中智学監修『本化聖典大辞林』の「最極微細

の根本無明をいふ。一切の煩惱悪業等は皆此より起る」

を引用している。

下書稿(三)の初期形態は次のようなものであつた。

あらめの衣身にまとひ

城より城をへめぐりつ

上漫四衆の人ごとに

菩薩は礼をなしたまふ

われ汝等を尊敬す

敢えて軽賤なさざるは

汝等作仏せん故と

菩薩は礼をなし給ふ

この無智の比丘いづちより

来りてわれを軽しむや

菩薩は礼をなしたまふ

菩薩は礼をなしたまふ



もとよりわれは作仏せん  
凡愚の輩をおしなべて  
われに授記する非礼さよ  
あるは怒りてむちうちぬ

第三連は、当初、「四衆は怒りて罵りつ／何ぞや」という二行があつたが、これが消されている。その後の手入れ段階で、第一連の次に「(われは不軽ぞかれは慢／こは無明なりしかもあれ／いましも展く法性と／菩薩は礼をなし給ふ)」が挿入され、また、第二連の次に「(こゝにわれなくかれもなし／たゞ一乗の法界ぞ／法界をこそ拝すれと／菩薩は礼をなし給ふ)」が挿入され、それぞれ最終段階まで削除されずに残っている。つまり初期形態の第三、四連が、削除等の指示がないままに残されている状況になっている。( ) に括弧入れた新しい第二連と第四連ができて、不軽菩薩の内面や、「御義口伝」に書かれていたような本覚的な記述は生かせることになっているが、ストーリーの展開としては、ここで怒った比丘が不軽菩薩を鞭打つシーンが出て来てもしっくりこない。そんな点からも『新校本全集』では「4行の次および8行の次の括弧でくくられた連の

挿入の結果、9～16行の二連は不要となり、消し忘れであるとも考えられるが、本全集では草稿の現状にもとづき、校訂に踏みきらなかつた」と書かれている。もちろん、この措置に否定的な須田(後掲A、B、E)の意見もあり、また、そもそも下書稿の成立順序が違ふのではないかという考えも出ているようである。ただ、萩原昌好(後掲)が書くように、「不要なのではなくて、どこかに挿入することを考慮していたか、もしくは別の作品化をめざしていたのか、今となってはどうしようもない。ただ、削除される予定だったとしても、そのような作品の断片が『新校本』の編者によって残されていることの方が大切なのである」というのが納得できる気がする。萩原は田中智学が、人々から罵られても受け入れる不軽菩薩を撰受(みずから容認し、その上で大義を説く)ではなく、折伏(真向かう相手を論破する)と解していることに驚かされたとするが、そうしたギャップが賢治の中にもあつて、それがこの最後の六行に表れているのではないかと書いている。

このように最晩年の信仰を語った文語詩であり、賢治自身にとつても貴重なものであつたと思われるのだが、未定稿に留め置かれているのはなぜだろう。

島田は「不輕菩薩」稿は、常不輕菩薩礼讃の詩篇である。いわゆる現実界における「ひと」のありようでない。そのことが未定稿に置かれた要因だったのでないか」とする。確かに「五十篇」にも「一百篇」にも宗教的な詩は少なくないものの、登場人物まで経典そのままに登場し、賢治自身のオリジナルな部分や経験にもとづいた部分が窺いにくいというのは極めて稀である。

また、岩手県外での取材に基づくものは定稿には至らず、未定稿に留まりやすいことについては、何度か言及してきたが、本作の舞台は岩手県どころか古代インドであり、そうしたことも影響していたのかもしれない。

未定稿に留め置かれもう一つの理由として考えてみたのは小笠原露と関係である。「未定稿」の「最も親しき友らにさへこれを秘して」を掲げておきたい。

最も親しき友らにさへこれを秘して

ふたゝびひとりわがあへぎ悩めるに

不純の想を包みて病を問ふと名をかりて

あるべきならぬなが夢の

(まことにあらぬ夢なれや

われに属する財はなく

わが身は病と戦ひつ

辛く業をばなしけるを)

あらゆる詐術の成らざりしより

我を呪ひて殺さんとするか

然らば記せよ

女と思ひて今日までは許しても来つれ

今や生くるも死するも

なんぢが曲意非礼を忘れじ

もしもなれに

一分反省の心あらば

ふたゝびわが名を人に言はず

たゞひたすらにかの大曼陀羅のおん前にして

この野の福祉を祈りつゝ

なべてこの野にたつきせん

名なきをみなあらんごと

こゝろすなほに生きよかし

詳しくは「未定稿評釈三」(「甲南国文69」甲南女子大学国文学会 令和四年三月)に譲りたいが、病床の

賢治の見舞いにやつて来た小笠原露に対して、賢治が怒りをぶつけて書いたと思われる文語詩だ。具体的にどういうやり取りがあったのかは分からないが、その日の見聞をメモしたと思われる賢治と同信で親戚でもあった関

登久也は、自らの手帳に「夜、高瀬露子氏来宅の際、母来り怒る。露子氏宮沢氏との結婚話。女といふのははかなきもの也」、「高瀬つゆ子氏来り、宮沢氏より貰ひし書籍といふを頼みゆく」と書き留めているという（「岩手日報」平成十五年七月二十九日）。

「雨ニモマケズ手帳」の二九〇三頁には、（昭和六年）十月二十四日の日付とともに、この時の経緯とも思われる内容を次のように書いている。

聖女のさましてちかづけるもの

たくらみすべてならずとて

いまわが像にくぎうつとも

乞ひて弟子の礼をとれる

いま名の故に足をもて

われに土をば送るとも

わがとり来しは

たゞひとすじのみちなれや

同じ日付で三二・三三頁には、次のようにある。

◎われに

衆怨ことごとくなきとき

これを怨敵悉退散といふ

◎衆怨ことごとくなし

「雨ニモマケズ手帳」の三四・三五頁には、翌日の十月二十五日の日付で、次のように書かれている。

◎たとへ三世の怨敵なりとも亦

斯の如き痛苦あらんをねがはじ

盛岡中学時代の友人だった阿部孝（「中学生の頃」

「四次元100」宮沢賢治研究会 昭和三十四年一月）は

「彼は一面なかなかの不平家で憤慨屋でもあった。他人の不愉快な態度にも、彼はすぐにぴんと反発して、蔭ではぶつぶつと不平をならべた」と書きながら、「しかしどんなに他人の悪口を言い、蔭口をはく時でも、結局彼は自分を批判し、自分を反省し、自分を卑下することを忘れなかった」としているが、露への猛烈な怒りを書き付けておきながら、翌日になると、少し冷静になって自分を振り返り、いくら恨みがあったとしても、その相手に痛苦を与えたいなどということとは、してはならない、と綴っていたということだろう。

そして十一月三日（田中智学らによって明治天皇の遺徳をしのぶ日として昭和二年に制定された明治節の当日でもある）に「雨ニモマケズ」が書かれる。つい数日前までの露への怒りは消えてしまったかにも思われるが、その怒りを反省したがために、法華経への帰依や父母や近隣への奉仕が書かれた、と解釈することもできるかもしれない。ただ、執筆年月日がわからないにしても「未定稿」に「最も親しき友らにさへこれを秘して」が残っていることから考えれば、賢治の人生にまつて特記すべき大きな出来事だと認識されていたのは確かかなようである。

ところで「雨ニモマケズ手帳」の七一〜七四頁に構想メモ「土偶坊」がある。タイトルの脇には「ワレワレカウイフモノニナリタイ」と書かれていることから、文語詩「不輕菩薩」や「雨ニモマケズ」との関連が指摘されていることは述べてきた通りだが、その第八景と第九景は、次のように書かれている（傍点原文ママ）。

第八景 恋スル女  
ア・ラ・幻・滅  
衣・

## 第九章 青年ヲ害 セントス

これだけから、どのような意図で書かれていたのかを考えるのは困難だが、さらにページを改めて「第十景 帰依者ノ帰依ノ女」と書かれている。日付はないが、直前に十一月六日の日付のある書き付けがあることからすれば、「雨ニモマケズ」を書いてから、幾日もたつてはいない頃だと思われる。

この「帰依ノ女」のモデルに「聖女のさましてちかづけるもの」とも書かれ、バプテスト派で受洗したともいう小笠原露のイメージが下敷きになったと考えることはできないだろうか。関登久也が「露子氏宮沢氏との結婚話。女といふのははかなきもの也」などとメモしていたことを考えると、「恋スル女」も露がモデルになっていた可能性はあるように思えてくる。

たしかに「雨ニモマケズ」を書く直前の十月二十八日には「快樂もほしからず／名もほしからず／いまはたゞ／下賤の廢軀を／法華経に捧げ奉りて／一塵をも点じ／許されては／父母の下僕となりて／その億千の恩にも酬へん／病苦必死のねがひ／この外になし」と書いており、その翌日には「厳に／日課を定め／法を先とし／

父母を次とし／近縁を三とし／農村を／最後の目標として／只猛進せよ」とも書いている。しかし、先に杉浦

(後掲A)の指摘を引いて「不軽菩薩」を書いたことが、「雨ニモマケズ」に「行ッテ」の書き入れを促した可能性について記したように、その仮定が成り立つならば、賢治は過去のメモも随時確認していたこととなる。だとすれば、賢治は「木偶坊」や「聖女のさましてちかづけるもの」などのメモについても確認していたことになりそうである。

法華経に対する帰依の心、父母や近隣に奉仕する気持ちも募っていたかもしれない。しかし、そうであったとすれば尚のこと、賢治は自分自身が陥っている「慢」をも自覚したのではないだろうか。

時期はさらに後になるが、教え子の柳原昌悦に書いた昭和八年九月十一日の書簡に、賢治は次のように書いている。

私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過って身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについてたものでもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しめ、同輩を嘲り、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ

引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却って完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かゞ空しく過ぎて漸く自分の築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です。

自らを「不軽菩薩」になぞらえて「ワレワレカウイフモノニナリタイ」と、また「雨ニモマケズ」にも、「サイイフモノにワタシハナリタイ」と書いた賢治だが、不軽菩薩が人々に打たれ、石を投げられても相手を罵ることなく崇拜したことと、小笠原露の無礼な振る舞い(詳細不明だが)に対して、「然らば記せよ／女と思ひて今日までは許しても来つれ／今や生くるも死するも／なんぢが曲意非礼を忘れじ」と書いたことを比べてみれば、とても自分が不軽菩薩を持ち出す資格がないことを悟らざるを得なかった、ということもあつたのではないだろうか。

「最も親しき友らにさへこれを秘して」は、定稿化するにしては余りにも私的な感情が綴られ過ぎており、これを未定稿に留めた理由は納得できるやうに思う。しかし、賢治自身の信念としては重要であつたはずの「不軽菩薩」について定稿化しなかつたのみでなく、現実世

界の記述を交えるなどの虚構化を施しながら完成に向かわせる試みもしていないのは、納得しにくい。現在残された資料のみから、賢治の私生活における喜怒哀楽までを掴もうというのは極めて困難ではあるが、小笠原露に対する怒りを抑えきれなかったことをきっかけに、自らの慢心を自覚したためでもあったのではないかと、今は考えておくことにしたいと思う。

### 先行研究

- 儀府成一「「屈折率」と「不軽菩薩」の間」(『人間宮沢賢治』蒼海出版 昭和四十六年十月)
- 小倉豊文「山上の堂のくらやみ」(『雨ニモマケズ手帳』新考)東京創元社 昭和五十三年十二月)
- 大屋敬吉「賢治童話と法華経」(『真世界』<sup>5934</sup> 真世界社 昭和五十八年九月)
- 分銅惇作「宮沢賢治の思想と法華経」(『宮沢賢治の文学と法華経』水書坊 昭和六十二年八月)
- 須田浅一郎A「詩「不軽菩薩」の最終形について」(『宮沢賢治の仏教』りん書房 平成五年十月)
- 須田浅一郎B「詩「不軽菩薩」の収束」(『宮沢賢治の仏教』りん書房 平成五年十月)

- 須田浅一郎C「詩「不軽菩薩」の賞味」(『宮沢賢治の仏教』りん書房 平成五年十月)
- 須田浅一郎D「詩「不軽菩薩」を導いた先哲たち」(『宮沢賢治の仏教』りん書房 平成五年十月)
- 中村稔「あらためて「雨ニモマケズ」について」(『宮沢賢治ふたたび』思潮社 平成六年四月)
- 高橋直美「「雨ニモマケズ手帳」に見られる賢治の法華経解釈について」(『東洋大学大学院紀要31』東洋大学大学院 平成七年二月)
- 立松和平「宮沢賢治と常不軽菩薩」(『宮沢賢治14』洋々社 平成八年六月)
- 丹治昭義「常不軽菩薩」(『宗教詩人宮沢賢治』中央公論社 平成八年十月)
- 須田浅一郎E「「不軽菩薩」という詩のドラマ」(『宮沢賢治に酔う幸福』日本図書刊行会 平成十年三月)
- 田口昭典「賢治童話と法華経について(一)」(『北域』50 北域社 平成十一年十一月)
- 石川教張「宮沢賢治の請願について」(『東京立正女子短期大学紀要29』東京立正女子短期大学 平成十三年三月)
- 萩原昌好「不軽菩薩」(『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』柏プラーノ 平成十四年七月)

- 対馬美香 「宮沢賢治の「文語詩」と「不軽の二十四字」  
 『法華仏教文化史論叢』平楽寺書店 平成十五年三月)
- 杉浦静 A 「昭和六年の新聞スクラップブックと宮沢賢治」  
 (「宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報 38 号」)  
 (「宮沢賢治学会イーハトーブセンター」平成二十一年三月)
- 西田良子 「宮沢賢治 最後のメッセージ」(『宮沢賢治読者論』翰林書房 平成二十二年三月)
- 松岡幹夫 「宮沢賢治における法華経信仰と真宗信仰 共生倫理観をめぐって」(『宮沢賢治と法華経 日蓮と親鸞の狭間で』論創社 平成二十七年三月)
- 島田隆輔 「「不軽菩薩」考 ひたすらな受容へ」(『宮沢賢治研究』文語詩稿) 未定稿 信仰詩篇の生成』ハーベスト社 平成二十七年六月)
- 田中良則 A 「宮沢賢治の文語詩 未完成稿 不軽菩薩 一」  
 (「真世界」6316 真世界社 平成二十七年八月)
- 田中良則 B 「宮沢賢治の文語詩 未完成稿 不軽菩薩 二」  
 (「真世界」6317 真世界社 平成二十七年九月)
- 田中良則 C 「宮沢賢治の文語詩 未完成稿 不軽菩薩 三」  
 (「真世界」6318 真世界社 平成二十七年十月)
- 今成元昭 「宮沢賢治編『撰折御文・僧俗御判』について  
 『撰折御文』の位相」(『今成元昭仏教文学論纂 5 法華経・宮沢賢治』法蔵館 平成二十七年十月)
- 田中良則 D 「宮沢賢治の文語詩 未完成稿 不軽菩薩 四」  
 (「真世界」6319 真世界社 平成二十七年十一月)
- 田中良則 E 「宮沢賢治の文語詩 未完成稿 不軽菩薩 五」  
 (「真世界」6320 真世界社 平成二十七年十二月)
- 中野新治 「ゼロ弾きのゴージュ」もう一つの祈り」  
 (『宮沢賢治の磁場』翰林書房 平成三十年三月)
- 山尾三省 「玄米四合」(『新版 野の道 宮沢賢治という夢を歩く』野草社 平成三十年十二月)
- 富山英俊 「心象スケッチ、詩「温く含んだ南の風が」、文語詩「不軽菩薩」に関する補論」(「宮沢賢治研究 Annual129」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成三十一年三月)
- 杉浦静 B 「元品の無明 「不軽菩薩」下書稿(二)」(『宮沢賢治 生成・転化する心象スケッチ』文化資源社 令和五年十月)